

天の美祿

酒とお！女あ！あと金え！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

"Heaven's gift"

若くして酒を知ったバーテンダーが贈る、至福のひと時。

目次

魅惑のラム	1
少年の日のテネシーウイスキー	13
漢の大吟醸	25
禁断のエッグノッグ	35
属毛離裏のスコッチウイスキー	53
精密射撃のショットガン	66
情熱のフランベ	89

魅惑のラム

" H e a v e n ' s g i f t "

知る人ぞ知るその名は、とある国の片隅にひっそりと立つ小洒落たバーに与えられたものである。その名が何を意味しているかなど、バーの名を冠するこの店を訪れる者ならば、変に考えずとも認知する事は容易であろう。

その名に恥じぬ至福の空間を求める者が今宵、また一人呑み込まれていく。



レトルトカレーの権威・ハウビー食品のCEOである千俵おりえは、未だ釈然としない様子でその扉に手をかける。ハウビーのCEOにしておりえの双子の姉であるなつめが「微睡むように静かで、滾るように熱い夜」と、具体性に欠けるとも陰影に富んだ言葉をもってして、この店の存在を仄めかした。おりえと並び『カレーの女王様』と呼ばれる地位にいる彼女が、そんじよそこらの……ましてやこのような片田舎で営む小さなバーに傾倒するなどにわかに信じがたい事だが、あの高飛車ななつめが、甘美なるひと時を想起するかのような恍惚とした表情でこの店を語っていた事を鑑みるに『地元で有名』程度のネームバリューを背負っているわけではないはずだ。

期待と疑心のせめぎ合いをそのままに、おりえはH e a v e n ' s g i f tの扉を開く。o p e nと書かれたプラカードが僅かに揺れ、慎ましいベルの音が彼女の入店を店内に知らせる。

その直後には、後悔の念がおりえを支配する。

シツクで落ち着きのある内装とはまるでかけ離れた、品のカケラも無い喧騒が、おりえの耳朶を打つ。店主のこだわりが感じられる装飾やインテリアも、炭鉱夫と見紛うほどに薄汚れた男たちが酒を貪るその姿が全て台無しにしている。

姉の言葉を妄想の種に、おりえ描いていた理想郷が音を立てて瓦解していく。入店早々、彼女が顔を顰めるのも無理はない。

「……いらつしやいませ。お一人様ですか？」

騒音の温床と称しても差し支えないこの空間に、一際若い男の声
が、鮮明かつ冷涼に響きわたる。喧しいざわつきは蓋を被せたかのよ
うにピタリと止み、呑んだくれていた男たちの視線はおりえの元へと
集中する。

無遠慮で、欲望に満ちた、なんとも下卑た目線ばかりである。決して自惚れではなく己の容姿とプロポーションに確かな自信があつた
おりえにとつて、それは別段不快に思うわけでもない至つて慣れたも
のであつたが、彼女のそんな様子すらをも我が物にせんとするかの如
く、より一層強い視線を感じた。

その視線の主はカウンターの向こう側……即ち、彼女の入店にいち
早く気づいた店主だつた。とても整つたアジア系の顔立ちで、手入れ
の行き届いた艶のある黒髪が特徴的だつた。しかし彼は、おりえに
とつてあまりにも若すぎる、まだ成人を迎えてすらいないであろう青
年であつた。

(ちよつと、まだ子供じゃない……)

まさしく疑心暗鬼を生ず……と言つたところだろうか。

つい数刻前までは雰囲気の良い洒落たバーに見えていたのに、蓋を
開けてみれば田舎者の小汚い溜まり場だ。あまつさえ、子供がシエイ
カーを振っていると来ている。世に言うセレブリティであるおりえ
に似つかわしくないどころか、あの姉がこんな場所に来ようものな
ら、語るに値しないほど酷評しそうなものである。

「ビューッ！とんでもねえ別嬪さんが来たぞ！」

「せっかくのヒビキの酒が、野郎だらけでクソまずく感じていた所だ。
最高だな」

「うちのワイフが顔面を複雑骨折した駄馬に見えてくるぜ！」

訛りの強い英語でおりえに叩きつけられた男たちの歓声は、知性も
品性も全く感じさせないもので、彼女が抱いていたこの店への期待を
更なる失望の彼方へと追いやってしまう。

「……興醒めですわ。冷やかしてごめんなさいね」

完全に興味を失ったおりえは、踵を返して先程開けたばかりの扉へと向かおうとする。彼女はハウビー食品のCOO。彼女の一分一秒と常人呼ばれ者たちの一分一秒とは、重みに雲泥の差がある。価値が無いと分かった片田舎のバーで油を売っている時間などない。

が、華奢な彼女の腕をゴツゴツとした無骨な男の手が掴んで離さなかった。

「おいおい、美人がいれば酒も美味しくなるってんだ。姉ちゃんみたいな美人さんをおいそれと手放すわけにやあいかなだろ」

かなり酒臭い吐息を吐き出しながら、一人の男がおりえを強引に引き止める。

「ちよつと、放して……」

「夜は長いんだからさ、そう急ぐ事ないだろ」

「俺たちや夜の楽しみ方を知ってんぜ？色んな意味で」

デリカシーもへったくれもない下ネタに冷ややかな待ったをかける者はおらず、完全に出来上がっている男衆はますます調子付いていく。

面倒な事になった……今の状況を嘆かわしく思わずにはいられないおりえは、藁にもすがる思いでカウンターへとSOSを目で訴える。しかし、カウンターに青年バーテンダーの姿は無かった。

「……お客様、他のお客様のご迷惑となる行為はご遠慮願います」

客の男たちのそれとはまるで対照的な、流暢な上流階級のイギリス英語がおりえの背後から聞こえた。彼女がすぐさま振り向けば、そこには至って事務的な笑みを貼り付けた青年店主の姿があった。

「おいおいヒビキ、まーた客の俺たちを差し置いて女かつさらってくつもりか？」

「これだけ良い女、ガキのお前にや勿体無い。乳臭いバーテンはすつこんで酒作つてろ」

店主の制止にまるで耳を貸さない男たちは、おりえを解放するつもりは微塵もないようだ。おりえの表情に焦燥の色が広がり始めたその刹那、終始乾いた笑みを浮かべていた青年店主が豹変した。

「おい。この店の中にいる全ては俺の客だ」

先ほどの精錬されたイギリス英語は何処へやら、訛りの強い英語で店主は男たちを真っ向から威圧する。

「お前らはもちろん、こちらの麗しき淑女も俺の客だ。俺はお前らに最高の酒を提供する。だから、お前らは俺の酒だけを求めてろ」

おりえの腕を掴んでいる男は、それなりに大柄でがっしりとした体つきをしている。喧嘩に強そうな見てくれをしているが、青年店主は臆する事なく男を睨みつけ、おりえを拘束している男の腕をギリギリと握る。

「……おうおう、客に対して随分な態度じゃねえか。この姉ちゃんと楽しい時間を過ごすか否かの決定権は俺にあつて、ヒビキにはねえだろうがよ。いつつもいつもお前はそうだ。横取りは感心しな……」

男が言い切るより先だった。

青年店主は、目にも止まらぬ速さで男の肘を強打した。短い悲鳴をあげた男は思わず掴んでいたおりえの腕を離す。その一瞬を逃す事なく青年店主が男の胸倉と腰元を掴み、足払いをかける。歴然の体格差を物ともせず、男はその場に引き倒される。全身を強打した痛みと衝撃に男が身を固めていると、容赦ない蹴りが男の顎を揺らす。

ものの一瞬で気絶してしまった男は、そのまま店の外へと蹴り出されてしまった。

「振り向かせたい淑女がいる時……お前は淑女の髪を引っ張って振り向かせるのか？もっかいママに淑女の扱い方を教わってこい、クソツタレ素人童貞が」

すでに何も聞こえていないであろう男に青年店主が罵詈雑言を投げると、険しい表情で残る男たちを睨みつける。

「Son of a bitch! 結局ヒビキ劇場じゃねえか!」

「綺麗な姉ちゃんが来ると絶対こうなるんだよなあ……ふざけんじやねえ。おいヒビキ、今日は酒代払わねえからな」

「アホくさ。おい皆、今日はお開きだ。スケコマシ店主やつ、常連の俺らより女をとりやがった」

「ヒビキの女誑しは今に始まった事じゃねえだろ。はあ、なんでヒビ

キばっかり……羨ましい……俺もジュードーとやらを習えば……」

男たちはそぞろに椅子から立ち上がり、ブツブツと呪詛のようになにかをつぶやきつつ、代金も払わず店を出て行ってしまった。

展開に脳が追いつかずフリーズしていたおりえは、男たちが散らかしていた酒瓶やつまみを手際良く片付けていく青年店主を、ぼけつと眺めている事しかできなかった。

恥ずかしい姿を晒していると、ようやくおりえが自覚を持つ頃には、店の中はすっかり様変わりしていた。それは、おりえがこの店に入る前まで抱いていた幻想そのものだった。

青や白などと言った煌びやかな電飾は少なく、暖かな電球の光だけが照らし出す内装は、味のあるウッドインテリアで構成されていた。先ほどまでの喧騒はどこへやら、バーテンダーが静かにグラスを拭く音と、ゆったりとしたピアノジャズのBGMが、動転していたおりえの心を瞬く間に落ち着かせる。

「改めて……千俵おりえさん、Heaven's giftへようこそ」

まるで迷い猫を抱き寄せるかのように甘く、優しい声で発せられたそれは淀みのない日本語だった。男たちに向けていた猛禽のような表情は嘘のようにその姿を消し、穏やかに微笑みかける日本人青年店主は肅々とお辞儀をした。

「へえ……日本人だったの。私の事、知ってたんだ？」

「あの千俵姉妹を存せぬ者など、テレビを見た事が無いかレトルトカレーを食べた事が無いかのいずれかでしょう。知らない訳がございませんよ」

にべもなく店主が紡いだ言葉におべっかや誇張評価はなく、それほどになつめとおりえの双子姉妹は有名だった。90年代より発売されて以来、累計700億食を売り上げていると言われているハウビー食品のレトルトカレー『カレーのプリンセス』という商品のパッケージに印刷されている、なんとも可憐な女の子の写真が、若かりし頃のなつめとおりえであるという事実は、90年代を知らぬ子供たちでも知っているほどの常識だった。……現在の彼女たちの年齢は各々で察

して、どうぞ。

「私の姉もここに来たのでしよう？ いったい何を注文したのかしら。私たち姉妹は、結構好みも似通っているから」

同じ物を……と、続けようとしたおりえを青年店主が指を振って遮る。

「貴女は千俵おりえさんであつて、千俵なつめさんではない。なつめさんにはなつめさんのためだけのギフトがあるように、おりえさんにはおりえさんのためだけのギフトがあります。それができないようでは、恥ずかしくてバーテンダーを名乗れませんよ」

「よく回る口ね。あなた、モテるでしょう？」

「生憎と私の周りに集まつて来るのは先ほどのような華のない男ばかりでして。お恥ずかしい事に、恋仲と呼べる間柄の女性はおりません」

苦み走つた表情でタンブラーに酒を注いで行く青年店主の姿は、歳に似合わず妙に様になっていた。

「ふうん……ねえ、さっきの人たち、常連だったのでしょうか？ 追い出すような形になつてしまつて良かったのかしら」

「うちの酒たちは店主に似たのか、お美しい淑女に目が無くてです……彼らに飲まれるより、貴女に飲んでもらう方がずつと嬉しそうだ」

店主は『BACCARDI』と銘打たれた酒瓶を掲げると、あどけなさの残る悪戯っぽい笑みを浮かべつつ、そんなキザったらしい事を恥ずかしげもなく言つて見せるのだ。まるで大人に憧れる子供が精一杯背伸びをしているようで、おりえは吹き出しそうになる。同時に、そんな青年店主の健気さに、可愛らしさを感じずにはいられなかつた。彼女の大人としての余裕が、そうさせてしまうのだろうか。

気づけば店主はすでにカクテルを作り終えていた。タンブラーグラスに注がれたそれはシェイカーを用いずステアされたカクテルで、透き通るような無色の液体で満たされていた。そして、氷の間を縫うかのように、ミントやライムのような物が点在している。

「モーター……」

「はい。自家栽培のイエルバ・ブエナを使った、本場のキューバで作られる物により近い味わいとなっています」

カラン……と、小気味よい氷のぶつかる音を立てながら、おりえはグラスを傾ける。

「ッ!？」

おりえの体がビクンツと反応を示さずにはいられなかった。

まるで一糸纏わぬ姿で夏の涼風を受け止めているかのようなミントの爽やかさが、先行して全身の隅々へと行き渡る。ライムが追い打ちをかけるかのように、その清涼感をさらなる物へと仕立て上げる。五臓六腑から全てをリセットされ、すっかりと澄み渡った彼女へ染み込んで行くかの如く、ホワイトラムのほのかな甘みが広がり始める。

その爽やかな後味とは裏腹に、アルコール度数の高いラムがおりえを芯から温める。

モヒートの清涼感溢れる余韻に浸っていたおりえの鼻腔を、食指を動かす肉の芳ばしい香りがくすぐる。

「ラム酒にはラム肉が合います。……決してつまらない駄洒落を言っているわけではありませんよ?」

店主がおりえの目の前に置いた皿には、ラム肉の串焼きが数本並べられていた。

「料理もできるのね」

「酒は料理を引き立て、料理は酒を引き立てます。料理を知らずして、至高の酒を提供できませんからね。……そして、至高の酒は麗しい女性をより引き立てるものです」

「お上手ね。じゃああなたのお酒、台無しにしないようにしなきゃいけないわね」

おりえは努めて上品な所作でラムの串焼きを口にする。モヒートによってクリアな状態にあった彼女の口腔内が、癖のないラム肉の味わいに染め上げられる。

「ん〜っ!」

おりえの喉奥から思わず声が漏れる。美味しい酒を飲み、美味しい肉に食らいつく……この言葉にできぬ幸福感を噛み締めずにはいられま

い。つい先ほどまで大人の余裕を見せていたおりえを唸らせるほどの、極上の至福。しかしながらそれは大人にのみ許され、大人のみぞ知る天の美祿。おりえは取り繕うことも無く、モヒートとラム肉を交互に堪能する。

恐ろしい事に、二十にも満たないであろうこの青年がこのギフトをおりえにもたらしたのだ。おりえの低くないプライドを刺激すると同時に、得も言われぬ火照った感情が彼女の奥底に灯される。

「……ねえ、あなたの名前は？」

「山崎響やまざきひびきと申します。響とお呼びください」

「響、私のモノにならない？」

おりえは妖しげに、そして艶やかに目を細める。彼女の泣きぼくろが遺憾無くその魅力を増幅させ、男を暴力的なまでに虜にするかのような女の色気を放っている。わざとらしく組まれた彼女の両腕が、これまたわざとらしく彼女の豊かな双丘を押し上げ、露骨すぎるほどに店主……響ひびきの精神を掻き乱そうとする。

何の予備動作もなく、唐突に女の武器をぶつ放された響の視線は、悩ましげな谷間へと向けられずにはいられなかった。仕方のない事である。不可抗力である。見るなど言う方が無理な話である。見ない奴はホモか貧乳派のどちらかであろう。仕方のない事である。

「困りますね……おりえさんだけでなく、私には私の酒を楽しむにしてくれているヒトが他にも巨万ごまんといる」

おりえはニヤケそうになるのを抑えるので必死だった。あんな小恥ずかしい台詞で口説きにかかってきていたはずの響が、おりえが誘引した途端にそっぽを向いたのだ。挑戦的とも言えるあからさまな駆け引きを前にして、何も思わない彼女ではなかった。おりえに灯された火種が見る見るうちに燃え広がってゆき、彼女をひどく妖艶に上気させていく。

「強いお酒、貰える？」

氷とミントとライムだけが残ったタンブラーグラスを揺らすと、おりえは蠱惑的な笑みを浮かべる。

「ヘビークラムを、ロックでいかがですか？」

「響の酒は、私を引き立てる至高の酒なんでしょう？ 自信が無いのかしら？」

「まさか。このお酒は間違いなく最高傑作です。おりえさんよりを艶やかに開花させる事など、造作ありません」

「ふふっ……じゃあ、ラムのロックを二つ」

口を動かしつつも、響が手を止める事はない。アイスピックを器用に駆使し、氷を砕いていく。並んだ二つのロックグラスに、削り出された天然水晶のようなロックアイスが落とされる。間髪入れずに濃い琥珀色の液体がグラスを中程まで満たす。

「ロン・カルタビオ XO 18年です。由緒あるカルタビオ蒸留所の最高傑作を名乗るに相応しいラムです」

焦がしたような甘さが香りとしておりえを酔いへと誘う。酒の香りを満遍なく味わうのも、ストレートやロックに許された特権。暫しの間、香りを楽しんだおりえはようやくグラスに口をつける。

その仕草のなんと艶めかしい事か。まるでグラスの縁を包み込むような柔らかな唇に、響は釘付けだった。あの無粋な男たちに向けられた時こそ何も思わなかったのに、響の視線は今のおりえにとってどこまでも心地の良いものであった。

ヘビールムでありながらも繊細な味わいが、優しくおりえを包み込む。そして、決して低くないアルコール度数が、確実におりえの全身を火照らせてゆく。

すっかり上機嫌なおりえを、香りで、気分で、味で、アルコールで酔わせてゆく。全てが完璧なバランスで構成されていた。

色鮮やかに上気していく美女を肴に、店主の響も自分に与えられたグラスを傾ける。

「何故でしょう。すでに知り尽くしたはずのこの酒が、いつもより一段と美味しく感じてしまう」

「知り尽くした気になっていただけではなくて？ 響はまだ若いんだもの。……あなたが知らない事、まだまだ沢山あるでしょう？」

おりえはまたしても蠱惑的に目を細めると、人差し指でロックグラスをかき混ぜる。指に滴るロン・カルタビオを、彼女の官能的な口が

飲みとっていく。10代やそこらの少女には決して演出する事のできないエロティシズムは、彼女が捕捉した男を着実に絡め取ってゆく。

「……響は細いと思ってたけど、結構筋肉質なのね」

カウンター越しに手を伸ばし、おりえは響の腕を無遠慮にペタペタと触る。それでいてどことなく遠慮気味でもあり、何ともいえぬいやらしい手つきで彼女の柔肌が響の腕をさする。

「ねえ、もつとこっちに來て？」

おりえは切なげな表情とともに上目遣いで響を見つめる。ここまできると、もはや駆け引きも何もない、おりえも響も、すでに蜜の沼に片足を突っ込んでいる。拒絶する理由もない響は、おりえの隣に腰掛ける。パーソナルスペースはとつくに侵されており、物理的にも精神的にも二人の距離は急速に近づいていく。

「さっきの響、とてもカッコ良かったわ。今の畏まった響よりも、ずっと野生的で男らしくて私は、好きよ？」

「……そうですか。みつともないところを見せてしまったと恥じていたのですが」

「何故恥じる必要があるの？あんなにも頼もしかったじゃない」

「おりえさんのような淑女は暴力を嫌うでしょう？あのような蛮行、貴女の目の前でするべきではないはずだ」

おりえはクスクスと小さく笑うと、蕩けるような表情で響にしなだれかかる。響もおりえの髪から漂う女の香りに、彼の色々を膨らませ、さりげなくおりえの腰に腕を回す。

この二人、完全に出来上がっている。

「……響は、女性を痛めつけるような事をするの？」

「とんでもない。男は殴って黙らせるものだが、女に手をあげる事は絶対に許されないし、許さない」

「そう……なら、女はどうやって黙らせるの？余計な事を聞いてしまいうけナイこの口を……どうやって黙らせる？」

おりえの試すような双眸は、あからさまにもほどがある意思表示と期待の表れだった。

響はおもむろにロン・カルタビオを口に含むと、そのままおりえと唇を重ねた。

「んっ!？」

おりえは驚愕に目を見開くと、響を両腕で掴んで身をよじる。が、その動きは緩慢としており、とても弱々しい。天の美祿にすっかり毒されたおりえは、抵抗する演技すらまともにできなくなっていた。

そんなおりえの様子などお構いなしに、響は彼女の後頭部をしっかりと掴んで、口腔内の酒を彼女へと流し込む。次第におりえは身じろぎをやめ、打って変わって響に体をすり寄せる始末だ。完全に火がついた彼女は、受け取った酒を己の唾液とともに響へと返す。互いの口にある酒を貪るように……乃至は、もっと別の何かを求めるように、二人は舌を絡ませる。

BGMのジャズピアノは、情熱的なアドリブに差し掛かる。無作法で趣ある旋律に、ピチャピチャと水の打つ音と衣摺れの音が混ざり込む。

どちらともなく唇を離し、互いの口に残されたブレンデッド・ラムを、喉を鳴らして飲み下す。おりえは酸素を求めるように熱い吐息を吐き出し、濡れた瞳で響を見つめる。籬たがなど、とつくに外れている。

「おりえ、俺はストレートよりもロックの方が好だ」

もはや敬語どころか、敬称すらもかなぐり捨てた響。しかし、おりえはそれを拒みなどしないし、自分がそうさせたのだ。恍惚と表情で全てを受け止める。

「ロックは氷が溶けるにつれ、絶えず味を変化させる。口にする度、味が変わる。何度でも楽しめるし、何度口にしても飽きる事がない」

「私はロックかストレート……どっちなのか確かめてみない？」

おりえの細い指が響の唇をじっくりとなぞる。

「私の事も、好きになつて？」

響は再びおりえの唇を奪う。当然、今度は酒を含まず。

欲望にまみれた二人はただひたすらにお互いを求める。両者の腕

は、相手を固く抱きしめて離さない。

酒は天の美祿なり。

神の贈り物であるそれは、百薬の長にして百毒の長。確実に人を恍惚へと誘い、間違いなく人を狂わせる。

蕩けるような甘さと戒めるような苦さを併せ持つギフトは、そのどちらとも味わえる大人にだけ許された、至福のひと時であった。

少年の日のテネシーウイスキー

鳥の囀りを目覚ましに、山崎響やまやまひびきは覚醒した。彼の住まう地にスズメは分布しておらず、聞こえてくるのは『変な鳥』の愛称で親しまれている小鳥の鳴き声である。世に言う朝チュンという物なのだが、鳴き声はチュンではなく変な鳴き声なので、充実感で満たされる素晴らしい朝かどうかは微妙なところである。

殊更、この青年店主にとつて今日という日の目覚めは、お世辞にも素晴らしい朝とはいえない、陰鬱とした物であった。

「やべえよ……やべえよ……」

未だ自分の隣で寝静まり、なんとも艶めかしい寝息を立てる美しい女性を一瞥した響は、両手で己の顔を覆う。

「いやさ、頭が悪いとかそういう領域超えちゃってるからこれ。俺は馬鹿なの？死ぬの？いや死ぬよ。発情期の猿の方がよっぽど理性あるだろこれ」

酒を飲ませて女をこます事など、この青年店主にとつては日常茶飯事だった。根っからの女好きである彼は、自分の店に好みの女性が来る度、常連のおっさんどもを追い出してでも口説き落としてきた。その守備範囲たるや、節操が無いという表現では生易しすぎた。若い女は言わずもがな、美人であれば年上もいける口で、既婚者にまで手を出す救いようのなさだった。相手の男に殺されそうになる事などしよつちゆうで、その度に響は二度と繰り返すまいと猛省し、固く決意するのだが、基本的に一晚寝れば忘れ去ってしまう暗愚の極みに達していた。

今回も数ある事案の一つに過ぎないのだが、切り替えていけの精神が通用するような相手ではなかった。

枝毛の一つもないプラチナブロンドのロングヘア。伏せられた長いまつ毛に、扇情的な泣きぼくろ。白磁のような美肌、あふれんばかりの胸部……響が好みそうな魔性の女ではあるが、彼女はハウビー食品のＣＯＯ……問題しかなかった。

「ついこの前もなつめに手え出して反省してたじゃん。何やってんの

俺。どんだけカレーの女王様が好きなんだよ。二人ともくっつそエロのはわかるけどさ、超えちゃいけない一線ってあるじゃん？じゃあ、お前が普段からつまみ食いしてる人妻は超えても良い一線なのかって言われると、それはまあ置いて、ハウビー食品のCEOとCOOはいかんでしょ。そして心のどこかで姉妹丼を期待している俺は三回くらい死ね」

おりえが" Heaven's gift" に来店した動機として、なつめによる何らかのクチコミが起因となっている事は、響の想像に難くなかった。そして、学習能力皆無である響の悪い癖がまたしても出てしまったという事だ。ただ、おりえに手を出すのは、なつめの時以上によるしくない状況を招く事を、響は予見していた。

おりえはなつめと並び『カレーの女王様』として名を馳せているが、優秀な人材の獲得に余念が無い事でありえは有名だった。これから才能を開花させるであろう在学生たちはもちろん、現役で活躍している著名人、果てには一流企業の幹部をヘッドハントするほどである。こうして関係を持ってしまった以上、響がおりえの熱烈なラヴコールを受ける事は確定した未来となった。

響は目の前の双丘に顔を埋めた。

宗教改革で有名なあのマルティン・ルターは言った。酒と女と歌を愛さぬ者は、生涯馬鹿で終わると。響はそのありがたいお言葉を免罪符に、考える事をやめた。腐敗した免罪符のあり方を問いただしたルターからしてみれば、何とも冒瀆的な現実逃避であった。



吹き付ける暴風が店の扉を軋ませる豪雨の夜、響は退屈そうに小説を読んでいた。こうも天候が荒れると、さすがのアル中たちも家の中で大人しくするため、連日連夜客が殺到する" Heaven's gift" ですら閑古鳥が鳴く。そんな状況下でありながら、来客を知

らせるベルが鳴ったのは、何番煎じか分からないような叙述トリックを使われイラついた響が小説をゴミ箱にブチ込んだのとはほぼ同時だった。

客はオールバックの黒髪に白のメッシュを入れた、全身黒ずくめの細身の男性だ。気品を感じる佇まいの男はアジア系の顔立ちをしており、自分と同じ日本人ではないかと響はあたりをつける。落雷を伴う程の悪天候の中、このバーに訪れた男性はベッタベタに濡れていた。

この時点で既に、この来客はやべーやつだと察してしまふ響であったが、雷雨を厭わずわざわざ来店してくれた客を無碍にするわけにもいかない。まして、一見さんこそ大切にする節がある響は、新品のタオルを男性に差し出す。

「Heaven's giftへようこそ。お一人ですか？」

響が上流階級のイギリス英語で問いかけると、すぶ濡れの来客は日本語で答えた。

「君は山崎響くん……で、間違いないね？」

「はい、そうですが……私の事をご存知で？」

「いや、僕が君の存在を知ったのはつい最近の事さ。……そうか。まさか、あの山崎が子供を作っていたとはね。あの血筋が世に憚るだなんて、なんとも嘆かわしい悪夢だ」

会った事もない人物に、遺伝子レベルで悪夢呼ばわりされた事に納得のいかない響であったが、いつまでも客に立ち話をさせるのはナンセンス。続きはこちらで……と、男性客をカウンターへと導く。

「ご注文は？」

「ワインは置いてあるかな？」

「もちろんです」

注文を承った響が瓶を下ろす。そのラベルには『PETRVS』の文字があしらわれている。

「……何の躊躇いもなくペトリュスを出すだなんて、恐ろしいバーテンドーがいたものだ。君が山崎の血を引いている事を疑うのが難しくなった」

シャトー・ペトリュス。僅か49エーカーのブドウ畑で栽培される、ボルドー右岸ではお馴染みのメルローから作られるそれは、非常に希少な高級ワインで、年間で多くても2500本ほどこしか生産されない。等級、希少性、価格……あらゆる方向から鑑みても、おいそれと封を切れるような代物ではない事は歴然。にも関わらず響がこのボトルを下ろしたのは、ひとえにこの来客が庶民という立場からかけ離れた財力を有しており、ワインを嗜む舌が肥えている事を看破している事実を暗に示していた。

響はボトルの底を掴み上げ、ワイングラスにペトリュスを少しだけ注ぐ。簡単な礼を述べた男性客は慣れた手つきでステムを持つと、鋭い目でワインの色を確かめる。反時計回りにグラスを揺らし、その香りに瑕疵がない事を確認すると、一旦グラスをカウンターに戻す。再びペトリュスが注がれるのを待ち、ようやく男性客はグラスに口をつける。

「おお……このメルローの甘く優しい香り……シルクのような舌触り……ペトリュスの中でもより美しい出来上がりだ」

ワインを飲み慣れているであろうこの男性客を唸らせる程だ。品質そのものの純粋な評価だけで一躍世界最高峰に登りつめたシンデレラワインは格別なのだろう。

「当たり年と言われている2005年のラベルです。ワインを知る人ほど、その極上の味わいを堪能できるでしょう」

男性客は費やせるだけの時間をかけて、ゆっくりとペトリュスを口の中で転がす。ワイン愛好家達が血眼になつて争奪戦を繰り広げるほどの味を、今この瞬間、彼だけの物にしているのだ。その背徳的なまでの独占欲を、着実に満たしてゆく。

「お客様は私の父の事を……存知のようですが……」

「気になるのかい？ 誠に遺憾かつ不名誉な事だが、僕と山崎とは同じ学び舎を共にした仲だ」

先ほどから男性客の言葉の中に、響の父に対する嫌悪感がふんだんに散りばめられているが、響の父は敵が多い人種である事を響は認知していたので、特に突っ込む事は無かった。

「薙切薊なきりあざみという名を耳にした事はないかな？」

「……それがあなたの名前ですか？薙切と言うと、あの遠月の……」
「そう、僕は薙切仙左衛門の婿養子にあたるね。もつとも、色々あつて薙切からは追放……もとい、勘当されているが」

自重する風でもなくそう答える男性客……薙切薊は、不敵な笑みを携え、ワイングラスを空にする。

薙切仙左衛門と言えば、一瞬でも在籍した履歴があるだけで料理人としての箔がつくとされている『遠月茶寮料理學園』の総帥として有名な男だ。遠月学園は料理に携わる界限において切つても切れない関係にあり、彼がいかに大きな存在であるかは皆まで言う必要はないだろう。

「薙切の家ともなると、縁を切るという意味合いが、一般的なそれとは大きく乖離しているでしょう。関係を修復しようとは思わないのですか？」

「互いが『美』としているものの定義が根本的に違えていて、調和を望めない程の軋轢がある。僕の理念を曲げなければ溝を埋めれないのなら、僕は復縁を望んだりはしないよ」

澄ました顔で二杯目のグラスに口をつける薊。しかしこの青年バーテンダー……山崎響には、その姿が酷く滑稽に映って見えた。

「そうですか。その割には、満たされていない顔をされてますよ」

酒を飲んでいる人間を相手にしたら、彼の右に出る者はいない。

「……なぜ、君はそう思う」

「薊さん、あなたは自分の美しくない部分を見た事が無いでしょう？」
「……………」

「恐らくあなたは、常にあなたの理想であり続けようとするストイックな方だ。薊さんは一度、盛大に酔っ払う必要がある。そのような美酒を嗜むだけでは、決して会う事のできない自分に……会ってみたくはありませんか？」

響は無造作に一本の角瓶を引っ掴むと、氷も何も入れていない口ツ

クグラスに、鼻の奥を焼き切るような強い酒臭さを放つ液体を並々注いでいく。

「……何だね、それは」

「ノンエイジのジャックダニエル。その辺のコンビニで買えるようなテネシーウイスキーですよ」

テネシーウイスキーはサトウカエデの炭で濾過をするという、独特の工程が挟まれるバーボンで、はつきりとした強いクセを持つ事が最大の特徴であるウイスキーだ。

訝しむような表情で薊がジャックダニエルを口にすると、その硬い表現をさらに響める。

「品のカケラもない。舌が痺れる。まるで泥水と工業用アルコールのブレンドでも飲んでいるかのような気分だ」

「まるで詩人ですね。酷い言われようだ。しかし、妥当の反応です。私が初めてジャックダニエルを飲んだ時も、焼き焦げた鉛筆にしゃぶりついているかのような気分でしたからね。それでも、当時ウイスキーに触り始めたばかりの私は、馬鹿みたいに格好をつけて飲んでました。ジャックダニエルはそういうお酒です」

響の言うところが何一つとして理解できない薊は、黙って続きを促す。

『クセが強い』……という、ウイスキーを知る人たちの受け売りをバカのひとつ覚えのように連呼していました。勿論、当時は何ひとつジャックダニエルの本質など理解しておらず、ただの格好つけで言っていたに過ぎません。今思い返しても恥ずかしくなるような過去ですが、それこそがジャックダニエルの味です。大人に憧れ、別に美味しくもない酒を盲信的に飲み続けていた少年だった頃があったからこそ……この『クセの強さ』がたまに恋しくなる」

響は、かつて少年だった頃にそうしたように、ロックグラスいっぱい注がれたジャックダニエルを、最大限に格好つけて呷る。口のかなかで暴れ回る強烈な風味と、焼けるようなアルコールの強さを、ただただ格好つけることで、押さえつける。その佇まいは、品位も何もないものであったが、バーボンを知らぬ薊の目には、とても男臭く……

そして、格好良くすら見えた。

己の趣にそぐわぬと理解しながらも、薊は自らが酷評を下したジャックダニエルを煽る。しかし、響のようにこの『クセの強さ』を愉しむことなどできはしないし、喉を通すのが苦痛でしかなかった。

慣れない酒を飲み、慣れない価値観に触れ、慣れない自分を演出しようと試みる薊は、気づかぬうちに自分をコントロールする為の感覚を失いつつあった。そんな薊に追い打ちをかけるかの如く、ジャックダニエルのきついアルコールが薊を静かに蝕んでいく。その鉄仮面のような薄い表情を柄にもなく朱に染め始めている薊の有り様から、先ほどまで彼が悠長にペトリュスを嗜んでいたとは、一体誰が想像できようか。

「……僕には一人の愛娘がいる」

響に訊かれたわけでもないのに、薊はポツポツと言葉を紡ぎ始めた。その声に覇気はなく、物憂げにグラスに視線を落とすその姿は、ひどく弱々しく見えた。

「美しく、素直で、才能に満ち溢れた、自慢の娘だ。この世に存在する、何物にも取って替える事のできない、僕にとって一番大切な存在だ。だから、彼女がこの世の誰よりも幸せになる事を、この世の誰よりも願っていた」

薊のグラスを握る力が徐々に強まっていく。

「響くん、僕たち人類に与えられた最大の幸福は何だと思う？」

「酒と女と金ですかね」

「山崎の息子らしい実に素晴らしい答えだ。零点だ。真の幸福とはただひとつ……真の美食を追求する事。僕たちは間違った物を食してはいけない。真に美しいとされる食を知り、見極め、その手にする事ができない人間は、紛れもなく人生に大きな損失を抱える事になり、その損失に気づく事なく死んでゆくのだ。僕の可愛いえりなに……そんな道を歩ませるわけにはいかない。だから僕は……僕はッ!! 培ってきた全てをえりなに捧げてきたッ!!」

優雅に、上品に、完璧にあらうとしてきた薊が、慟哭するかのよう
に声を荒げる。彼のロツクグラスがカウンターに叩きつけられ、僅か

に残っていたジャックダニエルが溢れる。響がそれを咎める事はなく、黙って薊のグラスにジャックダニエルを注いでゆく。

「仙左衛門お父さんは言った。『貴様がした事は教育ではない、洗脳だ』と。これ以上の侮辱を……これ以上の屈辱を、僕は知らない。これ以上の……これ以上の屈辱などあるわけがない！ たった一人の娘を洗脳しようとする狂人なんて、いるわけがないだろう！」

薊の声は震えていた。彼は涙しているのだ。業火の激情に蹂躪された彼は、顔を真っ赤に染め、酒臭い呼吸を肩でして、今まで外に出せないでいた全てを爆発させていた。

「薊さん、今のあなたは最高に格好悪いです。ですが、そんな今のあなたは、最高にジャックダニエルが似合っている」

響は偉そうにそんな事を言い、ストレートのジャックダニエルを何食わぬ顔で飲み干す。響のその姿に、薊は自分でも説明がつかないほどの羨望と嫉妬を抱いてしまう。

「薊さんは別段、取り返しのない状況にあるわけではない。ただあなたは一つの勘違いをして、一つの失敗をしただけです」

「失敗……だと？」

「あなたの御令嬢は、あなたの娘であると同時に一人の女です。女の扱い方がなっていないですよ、あなたは。女にとつての幸せとは誰かに導かれる事ではなく、誰かに受け入れてもらえる事です。特別な事は何もしなくても良い。女という生き物はどこか冷静で理知的に見えますが、基本的には感情に生きています。変に小難しい事を考える必要などなく、ただ隣にいて、ただ領いてあげるだけで良いんですよ」

二十にも満たないような子供が、子を持つ大人に女を語るのか……と、嘲笑うことなど、今の薊にはできなかつた。

「例えば、あなたの御令嬢が『友達と喧嘩をした』と、泣いていたとしましょう。男という生き物は、愛している相手には最良の選択をさせ、最良の道を歩かせたくなるものです。あなたのように、相手が幸せになる事を強く願っているから。しかし、それは間違いです。『お前のこういう言動が良くなかった』とか『友達の方にもこういう問題がある』とか『この発言について謝れば仲直りできる』とか、論理的

な説明も具体的な解決策も必要ありません。そんなものは他の家族や学校の先生にでも言わせておけば良いのです。それらの言葉は後々の娘の為にはなりません。今の娘の幸せにはなりません。あなたは父親という特権を行使し、美味しいところだけ持っていけば良い。娘が欲している言葉を投げかけてやるだけの簡単なお仕事です。ただ一言『大好きな友達にそんな事をされて、辛かったね』『自分の言いたい事が伝わらなくて、悔しかったね』『大好きな友達だから、明日には仲直りしたいね』と、ただ共感してあげるだけで、あなたは娘にとって居なくてはならない存在だと無意識のうちに認知してくれるはずだ」

「君はふざけているのか？そんな事をしたところで、娘の抱えている問題など何も解決できない。そんなものが娘の幸せと呼べるのか？」

「男の涙と、女の涙を一緒にするのは言語道断です。女が男に弱さを見せる時は、解決して欲しい時ではありません。支えになって欲しい時です。さつきも言いましたが、女は感情に生きる生き物です。理屈を聞いて欲しいんじゃない、感情を受け入れて欲しいんです。女を笑顔にしたければ、女の全てを男が受け入れてあげる必要がある」

響はおもむろにダーツの矢を一本つまみ上げると、店の一角に設えられたダーツボードめがけて投擲する。綺麗なジャイロ回転をしながら直進し、ポイントは20のトリプルを貫く。

「美食で幸せを掴みとる……とても素敵な考えではありませんか。そんな薊さんがすべき事は至ってシンプル、御令嬢にあなたの料理を振る舞い、その感想をただ笑顔であなたが聞いてあげる事。そして、御令嬢が作った料理を、ただ笑顔であなたが食べてあげる事です。何が美味しく、何が不味いのか……など、あなたが教えるものではなく、御令嬢が勝手に見い出すものです。あなたはそれに、ただ頷いてあげるだけでいい」

響は別の矢を手に取ると薊に差し出す。薊はなんとはなしにそれを投げるが、酩酊状態にある彼の投擲は危なっかしいほどに不安で、ダーツボードから大きく外れて店の内壁に突き刺さる。

「薊さん……あなたの隣にいた御令嬢は、笑顔でしたか？」

薊は思い返す。えりなが笑っているのを見たのはいつが最後だっただろうか……

「……ああ。僕が美食について教え始める前までは、ね」

「そうですか。生憎と私は子を育てた事が無いので、親としてどうかを論ずる事はできませんが、男として失格だと断言します。『嬉』という漢字は『女を喜ばせる』と書きます。女を笑顔にできないような男は、自分が幸せになれません。自分も幸せにできないような男が、女を幸せにできると思えますか？少なくとも、今のあなたには厳しいかと私は思いますよ」

薊はただただ項垂れ、ジャックダニエルに溺れる。自分の思想を貫く為なら、仙左衛門の義絶すらも厭わないと豪語していた威勢など、見る影もない。酔い潰れ、未成年に男のなんたるかを叩き込まれ、情けなく涙を流す姿は、お世辞にも良い歳をした大人のあり方とは言えない。しかし、響がそれを馬鹿にする事はなく、もっと酔い潰れろと言わんばかりにジャックダニエルを注ぎ続けた。

「響くん……僕はこれから、どうすれば良い？ただ一つを追い続けた僕には、他の道など見えていない」

「仙左衛門さんと和解すれば良いだけでしよう。男が女を理解する事は絶対にできませんが、男が男を理解するのは中学校の数学よりも簡単です。その為の場所と酒ならいくらでも提供しますよ」

薊は不思議だった。仙左衛門と和解する事など、この店に入るまでこれっぽっちも考えていなかったのに、すでに彼の頭の中はそれ一色だった。

「そして、薊さんが必ずしなくてはならない事は、御令嬢に謝る事……これは仙左衛門さんと和解するより簡単な事です。全ての女性は程度に違いこそあれど、慈母のように全てを抱擁する優しさを持ち合わせています。理念もプライドも何もかまかなぐり捨てて平謝りすれば、大抵の事は絶対に許してくれます。そうでなければ、今ごろ私は三桁近く殺されているはずですから」

唐突に響から放たれた、清々しいほどのクズ発言と自虐ネタを前に、薊は思わず吹き出してしまふ。この店に来てから初めての笑顔

……いや、長らく薊が見せる事のなかつた笑顔だった。

「やはり君は山崎の息子だ。クス以下の匂いがプンプンと漂っている」

「ほどほどにしておかないと、請求を水増しされますよ」

「申し訳ないが、ペトリユスの代金しか払わないよ。こんなクソ不味い酒を勝手に入れるだなんて、とんだバーテンダーがいたものだ」

響は意地の悪い笑みを浮かべ、ジャックダニエルの空瓶をこれ見よがしに持ち上げると、薊が不味いと言いなながらも飲み干した事を無言で主張する。

「今日は払わなくても良いですよ。きつと、いつかあなたはこの味が無性に恋しくなる」

「ふん……口直しがしたい。もう一度ペトリユスをいれて頂きたい」

仏頂面になった薊が注文をつけると、手にかかる奴だと言わんばかりの表情で響がワイングラスを取り出す。

「……薊さんの御令嬢は、お美しいのですか？」

「安心したまえ。君をえりなどは絶対に会わせない。絶対にだ。君がえりなに手を出したら命は無いと思え。必ず殺す」

「これは手厳しい」

響は小さく笑い、黙ってグラスを拭き始める。薊も目を伏せ、ワインを嗜む事に意識を集中させる。

ペトリユスの優雅な味わいと、店内に流れる軽快なジャズピアノのBGMは、完全にミスマッチだった。だが、このなんとも言えぬ不恰好さに、薊は触れた事のない世界を感じた。

それは、かつて薊が少年だった頃に漠然と思い描いていた『大人の男』に近いものなのかもしれない。それは薊にも分からないものでありながら、薊だけが持っている感性だった。

酒は天の美祿なり。

少年は大人に憧れることで酒を知りたがり、大人は酒を知ること

少年の日を思い出すのだった。

漢の大吟醸

"Heaven's gift"

普段ならば、安物のウイスキーの香りと男たちの野太い声が倒錯しているそこは、日本酒の仄かな香りと、たった三人の男の声が交錯していた。

「……何度言えば分かる。確かな才能を持つ者には、平等に機会が与えられる。その機会をモノにしてきた気概溢れる者こそ、本物と料理人となり得るのだ」

「分かっているのはお父さん、あなたの方だ。真の美食に触れられる人間は限られている。芸術を理解できぬ存在に芸術を追求する事など不可能であり、そもそも権利すら与えられていない。そんな下等な存在を遊ばせている今の遠月は、間違いなく凋落の一途を辿っている。……響くん。君もそう思わないか？」

「遠月にいる女性料理人は皆、例外なく美人だと耳にしています。遠月の未来は明るいんじゃないですかね」
「死ね」

三者三様の持論を展開させる結果に至った事の発端は、数日前まで遡る。薙切薊が"Heaven's gift"へ赴いて、程なくしての事だった。



「……何故今更になって戻ってきた、薊。金輪際、貴様がこの遠月に足を踏み入れる事は許さないと云ったはずだ」

遠月茶寮料理學園の理事長室は、ただならぬ緊張感に支配されていた。その原因たる威圧感を放つ老人は、遠月学園の総帥……薙切仙左衛門。そして、不敵な笑みを浮かべて相對するのは彼の婿養子である

薙切薊であつた。

「お父さん、貴方が僕に言いたい事があるように、僕にも貴方に言いたい事は山ほどある。だが、今だけは我慢していただきたい」

「貴様と話す事など何も無い。去れ」

その硬い表情を崩すことなく仁王立ちする仙左衛門は、薊の言葉に耳を貸すつもりはない事を明白にし、速やかな退出を強く促す。しかし、それを受けた薊がそれに応じる事はなかつた。

「……先日、やまやぎよいち山崎余市の息子が営むバーへ足を運びました」

「……………!!」

山崎余市。薊がその名を口にした途端に、絶えず表情を変える事になかつた仙左衛門が、驚愕の色を露わにする。

「山崎余市の……息子だと？にわかに信じがたい話だ」

「最初こそ僕も半信半疑でしたよ。だが、いきなり当たり年のペトリュスを下ろす大胆さ、酒を作る手よりもよく動く口、未成年の分際でやたら女慣れしている好色っぷり……あれは間違いなく山崎の血を引いている」

薊は怪訝そうな表現で想起する。やまやぎひびき山崎響のマセた言動の数々は、かつて遠月で共に過ごしていた山崎余市の在りし日を、鮮明に蘇らせるのだ。

「そうか、あの問題児に倅が……か。して、薊よ。そんな事を伝えるためだけに儂の目の前に現れた訳ではあるまい」

「ええ。お父さん、今夜に時間を作れませんか？」

薊の質問の真意を凶れない仙左衛門は眉根を寄せる。身構える必要などない……と言いたげに、薊は苦笑を携えつつ頭を振る。

「お父さん、酒を一緒に飲みましょう」

仙左衛門はあんぐりと口を開け、ただ立ち尽くす事しかできなかつた。



「……………お客様、貸切をご所望の場合はあらかじめお問い合わせしていただけませんかね？」

軽快なジャズピアノを背景に、ゆったりとした時間が流れるバー" Heaven's gift"の店主……………山崎響は、無然とした表情で徳利を浸した鍋に火をかける。本来であればこの時間は開店準備のため、客の姿はないはずなのだが、彼の目の前にはカウンターを隔てて二人の男性客が座っていた。

「いつでも場所と酒を提供すると言ったのは響くんじゃないか。自分の発言に責任を取れないところまで親に似たのかね？」

「仙左衛門さん、こいつ持ち帰っていただけませんか？」

青筋を浮かべた響が引きつった笑みで退店を懇願するが、仙左衛門は申し訳なさそうに首を横に降る。

「常識もわきまえずに面目無いが、どうか目を瞑っていただきたい。君と話したい事もある」

「……………食の魔王と呼ばれる貴方に頭を下げられては、断る事もできないでしょう」

迷惑である事は否定しない響だが、そこまで嫌がる素ぶりは見せなかった。

「偶然にも、今日は街で謝肉祭が行われています。もともと客が来るとは思っていませんでしたし、さしたる問題はありません」

「……………君は祭に行かなくても良かったのかね？」

響の言葉に少し負い目を感じたらしい薊が尋ねると、響は笑いながら言葉を返す。

「私が地元のイベントに顔を出すと、誰かしらに銃を向けられますからね。銃弾を避けながら持ち帰れそうな良い女を探すのは、流石に厳しいでしょう」

「聞きましたか？お父さん。この小僧、真性のクズですよ。どう考えでも山崎の息子です」

「ぬう……………」

仙左衛門は返す言葉すら見つからず、神妙な表情で青年バーテンダーを見やる。心外だと言わんばかりの表情で響はおどけるが、薊の凍てつくような冷たい視線が彼に対する評価を物語っていた。

「それにしても、余市の息子と来たか……随分と懐かしい名前が出てきたものだ」

響を見据えた仙左衛門が、懐かしむようにしてその逞しい顎髭を弄る。

「……私の父は遠月の卒業生にして、薊さんの同級生だと伺っております。あまり父の過去を聞いた事がありませんので、少し気になりますね」

「山崎余市……あやつは色々な意味で型破りな男だった。彼もまた、この薊や堂島銀、才波城一郎を筆頭に『極星寮』の生徒たちが十傑の席を欲しいがままにしてきた時代を生きてきた男だ」

仙左衛門が『才波城一郎』という名を口にした途端、薊が大きく表情を変えたが、なんとなく地雷臭いと察した響は特に突っ込まず、仙左衛門の話に耳を傾ける。

「あやつは訳あって『十傑』の座には居らなんだものの、その實力は学園内でも飛び抜けておったし、それに比例して癖の強さも随一であった。彼の料理を口にした者らを、確実に至福のひと時へと誘う事から、山崎余市は『楽園の管理者』と呼ばれていた。同時に、女にしか料理を振る舞わない事と、気に入った女生徒はおろか、遠月の女性職員、果ては提携企業の女性役員に手を出す事で悪名が高く、その女癖の悪さから『性欲の権化』とも呼ばれておった」

「とんでもない性犯罪者予備軍だ。よく退学処分になりませんでしたね」

「響くん。他人事のように言う権利が、君にあるとも思っているのかい？君にはその血が流れていて、かつその素質を満遍なく引き継いでいる。去勢をお勧めしたいくらいだ」

澄ました顔で湯煎にかけていた徳利を出す響を、薊は更に冷たい視線で睨みつける。が、そこに殺意が込められていない時点で、彼に

とつてはノーダメージである。もつとも、殺意が込められた視線ですら、彼にとつて慣れたものではあるが……

『九頭龍 大吟醸』の上爛です」

今更になつて、響は客へ提供する酒の銘柄を伝える。

本来、繊細に仕立て上げられた香りや味を台無しにすると言われ、大吟醸を爛にするのは好まれない。しかし、この九頭龍大吟醸は究極の『爛上がり』を目指して研究を重ねられ、糖度、アルコール度、アミノ酸度といった部分から緻密に調整が加えられた大吟醸酒だ。

もともと日本酒を好んでいる仙左衛門は、明るい表情で猪口を受け取るが、かたや薊は不服そうな顔をしていた。

「……君は、僕がワインを常飲している事を知っているだろう？なぜ日本酒にした」

「日本男児が語らう時は、日本酒と相場が決まっています」

「ふむ、粋な事を言う。山崎余市の息子である事が途端に疑わしく思えてきた」

「お父さん、騙されてはいけませんよ。こいつは親である余市以上に口が回ります。爽やかな好青年のような見てくれをしていますが、彼は歩く下半身です」

「誰だつて下半身は歩くものでしょう……」

くだらない事を言っていないで早く飲めとでも言いたげに、響は鼻で笑いながら二人に酌をする。

「爛でありながらも、大吟醸の上品なこの香り……飲む前から美酒のそれと分かつてしまう」

暫し香りを堪能した後、仙左衛門は猪口に口をつけた。

「うむ、大吟醸のきめ細いまろやかさ、口当たりの良い甘さ……爛らしからぬ贅沢な味わいであるな」

その風貌も相まって、日本酒を呷る仙左衛門はこれ以上になく様になつていった。隣でぎこちなく猪口に口を運んでいる薊とは、まるで対照的であつた。

「雍切家の二人がおいでと来ている。本来であればふぐ刺しでも出したいところですが、生憎と日本酒に合わせられる魚は持ち合わせてい

ません。こつちはアポ無しの貸切を受け入れているんですから、その辺りはご了承してもらえるとありがたいですね」

響が唐突に二人が来店して来た事を蒸し返すと、仙左衛門は思い出したように口を開いた。

「薊よ。貴様に義絶を言い渡した儂と酒を飲もうなどと……一体どういう了見だ」

バーに漂っていた、どこかぎこちなくも和気藹々としていた雰囲気は一気になりを潜め、緊迫した空気が広がってゆく。

「お父さん。貴方が僕に言い渡した決定と、貴方が統括する今の遠月の在り方に……僕は未だ納得をしていない」

「何度も言わせるな。貴様のはしてきた事は絶対に許されない事であり、貴様の思想は遠月にとって毒でしかない」

「ほう……それはそれは。では、何故その遠月は才波先輩のような料理人を生み出してしまったのです？僕が遠月にとって毒……面白い事をおっしゃる。今の遠月こそが、才能ある料理人をダメにする毒であると言うのに」

平行線だった。互いの理想と思想が折れる事も交わる事もなく、二人の言葉はぶつかり合っていた。より一層強くなる剣呑さが、彼らの間にある確執の大きさを示していた。

「私は良いと思いますよ、遠月学園。素敵な女性で溢れ返っているそうじゃないですか」

「女にとって毒でしかない君は口を開くな」

「それは過大評価と言うものです。娘の笑顔を奪った薊さんには到底及びませんから」

響に皮肉を皮肉で返された薊は、言葉を詰まらせる。売り言葉に買い言葉だった薊が、響の一言を前に固まってしまうその様は、仙左衛門の目を疑うものだった。

「……薊？」

仙左衛門が遠慮がちに声をかけると、薊は何かを誤魔化すように猪口を呷った後に、言葉を紡ぎ出した。

「お父さん。僕は、えりなにしてきた事に対して、後悔はしていない。

だが、強く反省をした」

仙左衛門は、薊から放たれた言葉に目を見開く。しかし、黙って薊の言葉を待つ。

「僕の教育は、間違いなくえりなを『神の舌』へと近づけた。彼女の絶対的な味覚は、今や世界の誰しもが認めるものであり、彼女の地位と実力を不動のものにした。過程はともかく、結果として僕が彼女に与えたものは、彼女にとってはもちろんの事、食の世界にとって不可欠のものであるはずだ。この事実だけは、貴方の主観が入ろうとも否定できまい」

仙左衛門は不快に顔を歪めるが、首を横に振る事は出来なかった。

仙左衛門の実孫にして薊の実娘である薙切えりなは、『神の舌』の異名で美食家や料理人たちの尊敬と畏怖を集めていた。幼き頃より一流の料理人の料理を食べて育ち、仙左衛門をして洗脳と言わしめた薊の教育を受けた事により、超常的な味覚を獲得した彼女が下す評価は、一流の料理人の命運を大きく左右するほどの影響力を持っていた。

また、その完全なる味覚をもってして作られる彼女の料理もまた、世界最高峰のものであり、遠月学園の最高決定機関である『十傑』の席を、最年少で勝ち取るほどだ。

食べても一流、作っても一流……薙切えりなという少女の持つ『神の舌』が、彼女が美食界に君臨するための確固たるアイデンティティである事は、薊の思想を受け入れられない仙左衛門にも否定できぬ事であった。

「……だが、それに引き換え、僕はえりなから笑顔を奪った。この事実だけは、彼女が『神の舌』で真の美食に到達しようとも、笑顔を取り戻そうとも、覆す事のできない事実であり、決して消す事のできない僕の罪だ」

薊が非を認めた。その事実は仙左衛門の心を大きく揺れ動かした。「お父さん……貴方に謝るつもりはないが、えりなには親として……いや、男として、はじめをつけなければならぬ」と思っている」

ようやく言葉を切った薊は、仙左衛門から顔を背けるようにして猪

口を傾ける。しかし、猪口に酒は入っておらず、薊は空を呑む。格好のつかない失態を晒したとばかりに、薊は自嘲的な笑みと共に猪口の底を覗みつける。

そんな薊の猪口に、仙左衛門は柔和な笑みを浮かべて酌をした。

「薊よ。暫く見ぬうちに、随分と男らしい酒の飲み方をするようになったな。こうしてお前と酒を酌み交わす日を……かつて僕は楽しみにしていたものだ」

「お父さん……」

「確かにお前がしてきた事は許される事ではない。……が、お前を許すか許さないかは、僕の決める事ではない」

仙左衛門はニイツつと口角を吊り上げると、薊の頭を軽く小突く。「きちんとえりなに謝るが良い。彼女がお前を許し、彼女の心を呪縛から解放できたのなら、僕はお前がもう一度『薙切』を名乗る事を認める。お前を遠月の教育者として迎え入れる事もだ」

薊は仙左衛門に注がれた酒を飲み干すと、仙左衛門から徳利をひつたくる。そして、仙左衛門の猪口に酒を注ぎ返す。

「貴方に言われるまでもない。えりなは僕の愛娘だ。彼女に真の美食の何たるかを教えきっていないが……彼女からそれを望まない限り、僕は彼女の行く末を見守り、それを受け入れる。そして、才能を持ちながらも目的を見失った有望な生徒たちは、僕が導く。それだけは僕にしかできない事だし、今の遠月には決してできない事だ」

仙左衛門は薊の注いだ酒に口をつけ、静かに頷く。えりなを『神の舌』へと導けたのは、ひとえに薊にはえりなを遥に上回る実力が備わっている事を意味している。また、真の美食を追求する薊の熱意は紛れもなく本物であり、そこに到達し得る料理人を牽引する事ができるだけのカリスマ性がある事を、仙左衛門は知っていた。だからこそ、かつて仙左衛門は、薊を婿として迎え入れる事を認めたのだ。

「……薊よ。僕は良い酒にめぐり逢えた。この若きバーテンダーには感謝せねばならん」

頼まれるより先に、新しい徳利を湯煎にかけていた響に、仙左衛門は笑いかける。響はキザつたらしく指を振り、小さくウインクする。『九頭龍 大吟醸』の蔵元はこの酒をこう評価しました。『大切な人と酌み交わす、もてなしの酒』……と。あなた方二人は、至極正しい飲み方をしただけであり、そこに私の功績はありません」

「相手に最も適した酒を提供する。それは誰にでもできる事ではない。酒を知り、料理を知り、人間を知る必要がある。山崎余市……在りし日のあやつにはそのチカラが備わっておった。そして、息子である山崎響もまた、その素養を持っていた。片田舎のバーテンダーで終わらせるには勿体ないほどの素養を、な」

「おだてても代金が安くなる事はありませんよ。ですが、遠月の総帥に認めていただけるのは非常に名誉な事です。……正直、相手が求める『至福のひと時』を提供する事に関しては、僭越ながら私の右に出る者などいないと自負しています」

響は己の発言を確かめるように、仙左衛門と薊を交互に見やる。すでに、彼が適切に選り抜いた美酒の味を知っている二人が、彼の言葉を馬鹿にする事など無かった。

「どうです？ 遠月学園に私を推薦入学させてみ……」

「寝言は寝て言え」

深い溝によって隔てられてきた雍切親子の心が一つになった瞬間だった。

「余市が在籍しておった当時は、ストレスで胃に穴が開くかと思っただほどだ。あのような毎日が再び三年も続くなど、儂はまっぴらごめんだ。残り少ない寿命を縮めたくはない」

「君はあの性欲獣の遺伝子を忠実に受け継いでいる。前にも言ったが、君をえりなに会わせるわけにいかないし、君は三回ほど死んだ方が良い。冗談は休み休み死ね」

「What the fuck……お前ら絶対最初から仲良かっただ

ろクソツタレが」

酒は天の美祿なり。

芯から人を温める熱燗は、男たちの蟠わたかまりすらをも融解していく。そんな彼らに共通の敵が存在する事は、より酒を美味しく飲む上で必要不可欠な要素であった。

禁断のエッグノツグ

そこは日本の某所。

人気のない薄暗いコインパーキングに、一台の黒塗りセダンが入車してくる。素人目から見ても高級車だと分かっってしまうそれは『メルセデス・ベンツ S400h』のラグジュアリーパッケージで、スマートフォンが貼られた車窓が後部座席にいる人物を完全に隠蔽してしまう。

開かれた後部ドアから、一人の男が降車する。中学を卒業したての少年と同じ齡をしていながらも、その身なりと大人びた雰囲気は年齢を曖昧にする。

「ありがとう滋乃^{しげの}。素敵な夜だったよ」

彼が甘い笑顔を向ける先には、艶やかな黒髪を簪^{かんざし}で留めた和服美人が頬を朱に染めている。彼女は有名な高級料亭『くら季』の会長であり、自らの頬にあてがった左手には白銀の結婚指輪が輝いている。

「響は辛気臭い男やわあ……イッコも来い^きひんクセに、ふらつと現れて……あないにウチを求めてきはる」

「滋乃は俺の女じゃないからね」

澄ました顔で響が放った言葉は、滋乃の背徳感をどうしようもない程に刺激する。かつては勝っていた罪悪感など、影も形もない。欲望を抑える術を忘れつつある彼女は堪らずといった様子で車を飛び出し、響へと抱きつく。

「滋乃、俺の香水の匂いが付くぞ」

「別にウチは、響の女になってもかまへんよ？」

滋乃は響の制止に歯向かうが如く、擦り付けるように体を密着させ、響の唇を奪う。人気が少ないとは言え、白昼堂々と不倫劇を繰り広げる滋乃は、そのリスクにすら得も言われぬ快樂を見いだしてしまっている。

罪の味を占めた大人の色気で、美貌で、身体で、匂いで、体温で、言動で……男を魅了させんと絡みついてゆく。

「悪い女だ。もっと君が欲しくなってしまう」

「あんじよう^上言わはるね。あかんのはお互い様や。ほな、気いつけてなあ響。ウチはおたくさんの事……ずっと待ってるで」

満たされた表情の滋乃を乗せたSクラスが去ると、パーキングには響だけが残された。彼の顔に笑みはなく、引き攣った頬に一筋の冷や汗が流れ落ちる。

「人妻って怖いわ」

本気で命の危険を感じ始めた響は深く反省をしたが、後悔はしていなかったし、次に滋乃と会える日をウツキウキで楽しみにしていた。

しかし、此度に響が来日した理由とは、滋乃と会う事が本命ではなかった。滋乃に送ってもらったこの地にこそ本命の目的があるのだ。

「待ってるよ、俺の可愛い子猫たち」

彼が悪い笑顔を向ける先には、広大な敷地にそびえ立つ、規格外なまでに大きな学園があった。



「不味い！」

汚れ一つない純白のコックコートを見に纏った一人の少女が、怒りをぶつけるかのような叱責とともに、牡蠣^{かき}雑炊^{ぞうすい}を目の前にいる男へ叩きつける。

「あつづ!?!」

高温の液体を頭から被った男は、堪らずのたうち回る。そんな男に同情の眼差しを向ける周囲の者らの頭上にも、同様に汁椀が叩きつけられていた。

「あなた方のグループが事業拡大に伴い、より多くの顧客に対応するための効率化を図っている事は耳にしています。だからと言って

……」

彼女に品を出した料理人たちは、一斉に震え上がる。美しい少女の底冷えするような鋭い目は、彼が料理人としての全てを失う事を如実に物語っていた。

「こんな品で私の舌を汚す事が、許されると思ってた？」

彼ら口々に謝罪の言葉を叫び、地に頭を擦り付けような土下座をする。しかし、彼らの品に酷評を下した美しい金髪の少女……雑切えりなが彼らに再び視線を向ける事は終ぞなかった。

「緋沙子、次の予定は？」

緋沙子と呼ばれたブレザーの少女は、精錬されたキビキビとした動作で書類をえりなへ差し出す。

「こちらです」

「編入試験の試験官……ふん、十傑に入ると面倒な仕事が増えるものね。着替えを済ませたら向かうわ」

えりなは辟易するようにため息を吐く。編入生の試験と言う、学園にとつて非常に大事な役割の一端を生徒がとり持つなど、通常ならば考えられぬ事。しかし、この遠月茶寮料理学園は料理こそが全て。料理で数多くの生徒をさし置き、のしあがった極小数の生徒に決定権が与えられているのだ。

「私の『舌』ひとつで、料理人の全てなど手に取るように分かります。試験なんてすぐに終わるわ」

えりなの言葉に頷く緋沙子の背筋を、ぞくりとする何か走る。それは、彼女が抱いているえりなに対する慕情の現れであり、これから編入試験を受けるであろう者たちに対する同情の現れだった。



幸平創真はらしくもなく、ただならぬ雰囲気気圧されていた。「全然イメージと違うんだけど」

彼は、自身にとっての越えるべき壁である父に『その学園で生き残れないようじゃあ、俺を越えるなんて笑い話だな』と焚き付けられ、この遠月茶寮料理学園への編入へと踏み出したのだが、彼が漠然と思いついていたものとは、この遠月学園はかけ離れていたのだ。

「今にもポツクリ逝きそうなおじいちゃんやんが、えつちらおつちら教えてくるような奴だと思つてたけど……とんでもない所に来ちまつたな」

編入試験会場へ続く道を歩く創真の周りには、いかにも高そうな黒塗りの輸入車が彼方此方に停まっている。編入試験を受けに来たと思いき同年代の少年たち隣には、例外なく執事服の男が立っており、彼らが良いトコ出のおぼっちゃまである事を明確にしていた。

「エリート校だとは聞いてはいたけど……なんか違う世界に来たみたいだ」

どれだけ見渡しても、単身でこの学園に乗り込んで来たのは創真だけである。つきまとう場違い感を振り払うように、創真は足早に試験会場を目指す。が、それが災いして側にあつたベンチを蹴つてしまう。ベンチには自分と同じ編入生と思われる少年が腰掛けており、執事に紅茶を淹れてもらっている所だった。

「ごめん、蹴っちゃった」

「気にしないで良いよ。君も編入希望なんだね？」

余裕に満ち溢れた笑顔で創真の過失を許容した少年は、自分の隣に座るよう促す。

「僕は二階堂佳明。家はフランス料理店を営んでいるよ」

創真の隙がデカすぎたのか、訊いてもないのに少年は自分語りを交えて自己紹介をする。遠月への編入を志す者が、彼のように実家が料理店であるにはありふれた事であつた。将来が約束されていてなお、彼らがこの学園への編入を志す事に、遠月と言う学園が料理界にもたらす影響力の強さが察せられる事であろう。

「奇遇だな！俺ん家も料理屋やってんだ。『ゆきひら』て言うんだけど」

「ゆきひら……？聞いたことがないな。料亭さんかな？」

「下町にある定食屋なんだけ……」

創真が言いきるより先に、笑顔を消した二階堂にベンチから蹴り落とされてしまう。

「低俗な庶民が……この僕と並んですわるなあああ！」

二階堂がヒステリックに叫ぶと、呆然とした表情で横たわる創真に蹴りを加える。それを制止する者はおらず、二階堂に同調するようにして創真を嘲笑う。

「君のような大衆食堂の庶民風情が来て良い場所じゃないんだよ、この遠月は！」

全国展開している和食チェーン店の跡取りや、関東エリアで幅を利かせている大問屋の倅……創真の周りにいる編入希望生は皆、料理業界のサラブレッドだと自負してやまない、プライドの塊でできている者たちばかりだった。

だが、創真の父が放った言葉が創真の頭から片時も離れず、彼の不屈の闘志に火をつける。

（食った事もねえのにゆきひら馬鹿にしゃがって！まだ入学すらしてねえのにこんな所で立ち止まってられるかよ。編入試験、絶対に受かってやる……！）

決意に燃える創真が、へっぴり腰で蹴りを加えてくる二階堂を掴み上げようとしたその時、甘すぎない爽やかな香りが、彼の鼻腔をくすぐった。顔をあげると、周りの編入希望生とは比較にならないほどスーツを着こなした男が、創真を遮るようにして二階堂の胸倉を掴み上げていた。

「砂埃たてるの、止めてくれないか？このスーツはアリシアからの……いやセシリアか？エルシーだったかもしれん。……とにかく、クソ高いスーツなんだ。汚してくれるなクソツタレが」

「貴様！坊っちゃんを離せ！」

執事風の男が悲痛の叫び声をあげると、ようやく男は二階堂を離す。今まで狼藉を加えられたことのない温室育ちの二階堂は、泡を吹いて気絶していた。

「立てるか？」

男は、啞然とした表情で見上げる創真に手を差し伸べる。その手首には高級腕時計が巻かれていたが、嫌みつぽさを出さないほど様になっていた。

「悪いな、なんか助けてもらって。あ、俺幸平創真な。お前は？」

「男の名前を訊く労力があるなら、女の一人や二人でも口説いてこい。幸平も編入試験に来たのか？」

「ああ。なんか高そうな服着てるけど、お前も良いトコ育ちの坊ちゃんなのか？」

「片田舎で時間を持て余している、しがないバーテンダーだ」

創真と歳は変わらないはずなのに、バーを営んでいるとこの男は言った。少なくとも、日本国内ではなく、海外に店を構えているのだろうと創真は察する。海外からもわざわざ編入を希望する人がいるという事実には、またしても遠月学園の存在の大きさに驚きを感じずにはいられなかった。

「いやー、いかにも金持ちのエリートですって顔した奴ばつかでアウェイ感あつたんだよね。俺は親父に言われたからだけど、お前はなんでわざわざ遠月まで来たの？」

男の境遇に親近感を覚えた創真は、いつの間にかすぐ目の前まで来ている試験会場に向かって、男と並び歩く。

「遠月には可愛い女の子が沢山いるって聞いたから」

「マジで何しに来たのお前？」

本気で訳が分からない創真だったが、試験会場に辿り着いた今、これ以上の私語は望めそうになかった。

試験会場には数多くの編入希望生で溢れており、期待と不安の入り混じった緊迫した空気に包まれている。彼らの落ち着かない心の現れか、絶えず室内はざわついていたのだが、一瞬にして彼らは噤み、異常とも呼べる静寂が空間を支配した。

「なんだ？急に静かになって……」

不思議に思う創真だったが、編入希望生の視線がある一点に定められている事に気づく。そちらを見やれば、今しがた入室して来たばかりと思われる、金髪の少女の姿があった。彼女は無然とした表情で仁

王立ちをしており、その態度は慇懃無礼極まりないものであった。
(制服を着た女の子……？まさか、遠月の生徒か？)

なんで在校生がこんな所に……と言う、創真の疑問を打ち砕くようにして、金髪の少女は静まり帰った室内に言葉を響かせた。

「本日の編入試験を一任されました、薙切えりなど申します」

室内は再び騒然とし始めた。

「薙切えりなつて、あの遠月総帥の実孫の……」

「嘘だろ……なんで『神の舌』がこんな所に……!」

「やべえよ……やべえよ……」

「薙め、こんなに可愛い子を俺から隠そうとしていたとは……次会ったら殺す」

試験官が名乗ると同時、会場に絶望の色が広がってゆく。誰からもなく、呪詛のようなつぶやきをブツブツとこぼし始めたのだ。

「な、なあ……お前もあの薙切つてやつ知ってるの？」

周りの反応に戸惑いを隠せない創真が、先ほど助けてくれた男に問いかけると、男は険しい表情で首を振る。

「知らなかったから怒っているんだろぅが」

「いや、なんで怒ってるの？」

創真の混乱が悪化したただけであった。

「緋沙子、入試課からの通達は？」

薙切えりななる少女が隣にいる同じ制服の少女に問いかけると、彼女は編入試験の要項を読み上げていく。

「まず始めに10人単位で集団面接を行い、そのあと3品ほど調理実技を実施します。それを通過した者から……」

「……面倒ね。調理台をここに!」

緋沙子の声を遮ったえりなは、調理台を準備するよう命じる。程なくして運び込まれた食材の山から、えりなは鶏卵を一つ掴み上げる。

「卵をメインに、料理を一品作りなさい。私の『神の舌』を喰らせた者に、この遠月学園の編入を認めます」

えりなの言葉に、思わず創真は小さくガツポーズをする。堅苦しい面接や筆記などを煩わしく思っていた彼にとって、願ってもいない展開だった。しかし……

「なお、今から一分間だけ受験の取りやめを認めましょう」

えりなのその一言を皮切りに、編入希望生たちは転がるように逃げ始めたのだ。

「ええ!? なんてこいつら逃げてんの!」

先程まで散々創真を見下していた二階堂ですら、ガチ泣きしながら会場を後にしている。雍切えりなが自分の作った料理を実食すると言う事の意味を知らぬ創真にとって、それは理解の苦しむ光景であった。

数多くの編入希望生でひしめきあっていた会場は、一瞬にして閑散とした空間へと変わり果てる。

「……下らない。見込みのない愚図ばかり。あんな連中に私の貴重な時間を費やしてる暇なんてないわ。さ、早い事おじい様に伝えましょう。合格者はゼロ、と」

えりなは戸惑いの表情を浮かべる緋沙子に声をかけると、そそくさと退室をしようとする。しかし、編入希望生の全員が恐れをなして逃げたわけではない。

「作る品は何でも良いの?」

試験会場にまだ人が残っていたという信じ難い現実を叩きつけられたえりなは、ゆっくりと振り返る。

ボタンを全開にした詰襟を羽織ったツーブロックの男と、イングリッシュ・ドレープの3ピーススーツを着こなす黒髪の男が、試験官であるえりなを真っ直ぐと見据えていた。



「不味いわよ!」

腰が砕けそうになる程の美味。幸平創真の作った『化けるふりかけごはん』は、えりなの知らぬ未開拓の食の世界へと誘い、えりなの舌を確かに唸らせた。だが、下町の定食屋が作った、庶民的と言う他ないこの料理を美味と認めるのは、えりなの高いプライドが許さなかった。

「君のような料理人は遠月に必要ありません!不合格です!」

「ええええええええ!」

完全に受かると確信していた幸平創真は、えりなの言い渡した合否に納得がいかないと言う表情で抗議する。

「ウツソだろお前!めっちゃ美味そうに食べてたじゃん!」

「図に乗らないで!二流のあなたが作る料理なんて不味いに決まってるじゃない!不合格は不合格よ!」

なぜか涙目で凄むえりなに気圧された創真は、これ以上食い下がる事を躊躇ってしまう。

「マジか……不合格かよ……マジか……」

どんよりとした重い空気を発しながら、創真はトボトボと調理室の後にする。生き残れなければ論外……と、父に言われた学校に、彼は入る事すらできなかつたのだ。そのショックは計り知れないものだろう。

「あ、お前も残ってたんだな……俺は落ちちやつたけど頑張れよ。あの女に美味いって言わせるの、多分めっちゃくちや難しいぞ」

創真は去り際に、壁にもたれて一部始終を見届けていたスーツの男に声をかけると、彼は小さく笑う。

「惜しかったな幸平。せっかく女を喜ばせる料理を作れると言うのに。女を悦ばせるにはまだまだ遠いな。あの手の女の子は、強引に押し切れば一発だぞ」

「なあ、俺達が今してるのって料理の話だよな?」

「自分で考えるのも勉強だ。まあ次は頑張れ。お前なら受かるさ」

微妙に会話のズレを感じた創真が問うが、意地悪な笑みを浮かべた男にはぐらかされてしまう。

「親父になんて言えば良いんだ……」

大口を叩いておいて入学すらままならなかった創真は、陰鬱とした表情のまま試験会場を後にした。



創真の退出を見届けた男……山崎響は、小気味よい革靴の足音を鳴らしながら、えりなの元へと近づく。

「あなたもいたのね。さっきの男の様に恥を晒したくなかったら、今すぐ取りやめても良いのよ?」

「まさか。君に教えたかった味が彼にあつたように、俺にも君に教えた味がある」

「何を言い出すかと思えば……この私に教えた味がある、ですって?笑わせないで頂戴」

えりなは鼻で笑い、呆れるように頭を振る。目を閉じ、大きく溜め息を吐く彼女だったが、不意に優しい柑橘系の香りが彼女を包み込む。それと同時に、何か彼女の唇に触れた。驚いたえりなが慌てて目を開けると、すぐ目の前まで近づいていた響が、えりなの口元に人差し指をあてがっていた。

「なっ!?!」

「きつ、貴様!えりな様に何をする!」

えりなが慌てて仰け反ると、隣にいた緋沙子が物凄い剣幕で響を威嚇する。

「何をする……か。彼女を唸らせる卵料理を作る事以外に、何かあるのか?」

至極真つ当な質問を、至極真つ当な答えで返された緋沙子は言葉に

詰まる。

「卵を使っていれば何を作っても良い……その言葉に嘘は無いな？」

響の質問に、未だ顔を赤くしたえりなが訝しむように答える。

「……失礼な男ね。なんで嘘をつく必要があるのよ。さっきの男の料理を見ていたら分かるでしょう？卵がメインなら何でも良いわよ」

えりなの言葉に満足した響は、ようやく調理台へと向かう。踵を返した響からふわりと漂う香水の香りが、先ほどのやりとりを想起させ、えりなを再び赤面させる。

「なんなのよ、あの男……！」

えりなは幸平創真の元と一緒にファイリングされた、もう一つの履歴書を手に取る。

（ヤマザキ、ヒビキ。出身はスコットランド。随分遠くから来たわね。見た目も名前も完全に日本人だけど……Heaven's gift?聞いた事がないわ。スコットランドは伝統的な料理が多いって聞くけど……）

彼の来歴に興味が続かないえりなは、調理に必要な材料と道具を揃える響を見やる。彼の身だしなみに対する気遣いは、とても庶民のそれとは思えない。しかし、食の世界に精通しているえりなですら"Heaven's gift"という名は耳にした事がなかった。

「えりな様……あの男のスーツ、イギリスの高級ブランドですよ。腕時計もロレックスです。只者じゃないですね」

緋沙子はひっそりとえりなに耳打ちするが、響の身につけているものはそれぞれ全て違う女性に買い与えてもらった物であり、彼が只者ではないという言葉に強ち間違いはなかった。悪い意味ではあるが。

そんな少女2人の無遠慮な視線などどこ吹く風、響は淀みない動作で調理を開始する。鶏卵を割った響は卵黄をボウルに落とし、砂糖を入れてからビーターでかき混ぜてゆく。その横で牛乳に少量のシナモンを振った鍋を弱火にかける。

「……彼、かなり慣れてるわね」

「ええ……大事な試験であんなに遊んでいる者など、見た事がないです」

響はただテキパキと料理をこなしているのではなく、動きに遊びを多分に含んでいる事に二人は目が行った。

片手で卵を割りつつ、空いたもう片方の手でまだ割っていない卵をジャグラーのように弄んだり、調理器具をドラムスティックのように振り回したり、口笛を吹きながら靴底でリズムを刻んだり、とにかく落ちつきがなかった。だが、食材や調理器具を落とすような事はなく、調理に支障をきたす事もない。また、それらの動きに、わざとらしさもぎこちなさもなく、彼が普段から客の前でそうしている事を窺わせる。まるでこの試験会場が彼の空間であるかのような思わせ、軽快なジャズがBGMとしてかかっているかのような錯覚すら覚えさせる。

火にかけてた牛乳からわずかに湯気が建ち始めたところで、響は十分に泡立てた卵を少しずつ鍋に入れ始める。この間も鍋を混ぜる手を止めない事は忘れない。

何を作るのか……という好奇心もあるが、えりなと緋沙子は気づかぬ内に釘付けになっていた。

不意に響が顔をあげ、二人に微笑みかける。目が合った事と、見つめていた事に気付かれた二人は、何故かこみあげてくる羞恥に勝てず、つい響から目をそらしてしまう。

二人がさりげなく視線を戻す頃には、響の料理は最終工程に取り掛かっていた。よく混ぜ合わせた牛乳と卵黄にメイプルシロップを加え、ストレーナーを通して卵の泡を濾す。そうしてカップに注がれた黄金色の液体に、適量のシナモンを振りかける。

「エッグノッグです。冷めない内にどうぞ」

えりなは呆れのみ、声も出なかった。エッグノッグと言えば、クリスマスによく作られる北欧の飲み物で、子供たちが好むとして一般家庭で親しまれているようなものだ。その分、レシピも至って簡素で、あらゆる美食に触れてきたえりなの舌を唸らせるには、あまりにも捻りもインパクトもない物であった。

「はあ……さっきの幸平創真と言い、どうしてこう……」

えりなは調理の過程を見ている。響の作ったエッグノッグの質な

ど、口にするまでもなく察しがつく。

「素人の作るそれでは無いようだけど、その程度で私の食指は動かないわ。料理を知り尽くした私には、君が何を作ったかなど手に取るようにして分かるのだから……」

「えりな。君の舌は料理しか知らないだけだ」

「なっ……」

「えりな様を呼び捨てにするなど……身の程を知れ！」

響は殺気立つ少女二人を宥めるように微笑むと、もう一度カップをえりなに差し出す。

「飲めば分かる。何事も、冷めない内が一番美味しい」

えりなはしぶしぶカップを受け取り、口元へ寄せる。古代より愛を掻き立てると言われているシナモンの香りが、着実にえりなの意識をエッグノッグへと傾けていく。

彼女がエッグノッグに口をつけた時、彼女を待っていたのは『裏切り』だった。

「違う……違うわー！」

彼女が想定していた全く別の味が、エッグノッグの甘く、暖かな味わいに隠れこむように紛れ込んでいた。えりなの知らない、柔らかく爽やかな香りの後に訪れる、どこかスパイシーな大人の余韻。そして、わずかに含まれたメイプルシロップを隠れ蓑にした、熟成された深い味わいが僅かに顔を覗かせている。

エッグノッグというチープなベースに、不釣り合いなほどエレガンスな隠し要素が、絶妙に調和している。子供のピアノ発表会で可愛らしい子犬のワルツを弾いていた少年が、急に情熱的なアドリブジャズを弾き始め、聴衆の心をつささらっていくかのようにだ……と、えりなの持つ独特な感性が、このエッグノッグの虜になっていた。

「……えりな様、どうされました？」

緋沙子の声はえりなに届いていない。このエッグに隠された何かを暴く為、えりなの意識はこのエッグノッグのみに注がれている。

飲めば飲むほど、自分を引き込んでいくかのような、この『秘匿された味わい』は、知らず知らずのうちにえりなの心を焼き付けてゆく。

カップの中身が空になりそうになった所で、ようやくえりなの『神の舌』が、真実に辿り着く。

(この二つの隠し味……何処かで……調理酒の……っ!?)

えりなが何か気づき、何かを叫ぼうとした時、再びあの香りがえりな鼻腔をくすぐる。響がえりなを黙らせるように、またしても人差し指をえりなの口元に当てたのだ。

「っく!!」

赤面したえりなが響から距離を取ろうとするが、優しくえりなの後頭部を包み込んだ彼の手のひらが、それを阻止する。

「ちよつと！何す……」

「良いの？バレちゃうよ？えりながお酒を飲んだ事」

えりなの耳元で男が小さく呟く。より強くなる響の香水の匂い、耳をくすぐる響の吐息、直に伝わる響の体温……まるで男に対する免疫を持ち合わせてないえりなから余裕を奪い去るのは、至極簡単な事であった。

「おい貴様！えりな様になんたる狼藉を……」

「や、やめなさい緋沙子！」

響に掴みかかろうとする緋沙子を、えりなが慌てて制止する。緋沙子は呆然とした表情で、ただその場に立ち尽くしてしまふ。

「あなた、未成年の私に酒を……それも、編入試験で飲ませるだなんて、正気なの!?!」

緋沙子に聞こえないよう、えりなが小声で響を咎めるが、響は澄ました顔でえりなに囁く。

「俺が飲ませた……？えりなはさつき、俺の料理は手に取るようになって分かるって言ったよね？酒が入ってる事を知ってて自分から飲んだ事になるけど」

「ち、違うわよ！まさかブランデー・エッグノッグを作るなんて思わないじゃない！」

ブランデー・エッグノッグ。それはただのエッグノッグに非ず、お酒を使った大人のエッグノッグ。

響が密かに入れたのはコニヤツクの『カミュ X・O エレガンス』とラムの『ロン・サカパ センテナリオ 23年』だった。えりながすぐに分からなかったのも無理はない。調理酒として極微量しか口した事がない未成年の彼女が、酒の味わいや風味を知るわけがないのだ。

「お酒なんて、一体いつ入れたのよ!？」

「……えりなはまるで、汚れを知らぬ天使のように純粹だ。男の毒牙にかからないかとても心配で仕方ないな」

現在進行形で毒牙にかけているこのバーテンダーにとって、気づかれないように女の飲み物にアルコールを仕込む事など造作もない事だ。

「何訳分かんない事言ってるのよ!と、とにかく!こんな物で君の合否を決めるわけにはいきません!」

「ん?卵がメインなら何でも良いって言ったよね?エッグノッグなんて言う、わざわざ名前前に卵が入ってる物にしてあげたのに……嘘を吐くなんて、えりなは酷いな」

「あ……うう……」

過去の自分の発言が全て墓穴を掘ってしまったていう事実、えりなは声にならない唸りをあげる。

「なあ、えりな。俺のエッグノッグは美味しかったか?」

「……美味しくなんかいいわよ!」

「悪い子だ。また嘘を吐くのか?」

「くっ……」

「聞こえる声で、もう一回言っただけいいな」

「美味しかったわよ!」

えりなが急に大声を出した事と、響の作ったエッグノッグを認めたという事実、緋沙子はあぐりと口を開ける。

「えりな様、一体どうされたと言うのですか!?その男に何か弱みでも握られているのでは!?なんだかお顔が赤いですし……」

「べ、べべべ別にそんな事全然これっぽっちもそんな事全然ないわ

よ緋沙子の馬鹿あ！」

「なあっ!？」

尊敬するえりなに馬鹿と罵られた緋沙子は、今にも血を吐きそうな悲痛な表情でうずくまる。興奮した様子で息を荒げるえりなに、追い打ちをかけるように悪魔が囁く。

「……もつと飲みたいでしょ？」

「飲みたたくても飲める訳ないでしょうお酒なんだから！」

「飲みたいのは否定しないんだ？」

「ぐっ……とにかくもう飲みません！」

「俺はもつとえりなに知って欲しいけどね、大人の味を」

響はようやくえりなから離れたと思いきや、わざとらしくえりなの目の前でエッグノッグをカップに注ぐ。そして、再三えりなに囁きかける。

「大人の味。それは、酒の味。罪の味。秘密の味……あと一つは、まだ知らなくても良い。それがえりなの魅力のひとつだから」

それが酒だと知っていながら、えりなはエッグノッグに口をつけてしまう。いけないと知りながら、えりなはエッグノッグに口をつけてしまう。緋沙子が何も知らない事を利用して、エッグノッグに口をつけてしまう。

丁寧に仕立てられた甘いエッグノッグに調和した、罪深いまでに背徳的な酒の味わい。未知なる世界へと繋がる隠し扉を、えりなはこっそりと開いてしまう。

「今日の一品は、君だけのものだ。えりなと俺だけの秘密じゃないといけない」

余裕を失っている人間は、全て自分の都合の良いように解釈しようとする心理が働く。えりなには、彼の甘言蜜語が『内緒にしてあげるから、もつと飲んでも良いんだよ』と、えりなの罪を優しく受け止める言葉に聞こえてしまうのだ。

気づけばえりなは二杯目のエッグノッグを飲み干していた。これは異常だ。今の自分は普通じゃない。そう自覚していながらも、響が入れた三杯目に手を伸ばすえりながいる。禁断の果実に手を伸ばす、

イヴの如く。

自分をこうさせたのはアルコールのせいだ、この男のせいだ……自己を正当化させるために、えりなは響を睨む。

「……許さないわ、絶対に」

「えりなは絶対に許すよ。誰よりも優しくて、誰よりも素直な子だから」

甘い声でそう返されたえりなは、更に顔を赤くする。それがどんな感情に起因しているものかなど、今の彼女に知る術はない。

「近いうちに、情けないツラで謝る男がえりなの前に現れるはずだ。俺の事は許さなくても良いから、彼の事だけは許してやって欲しい」

響の言葉の意味を凶りかねるえりなは首を傾げる。そんなえりなの頭を撫でつけ、響は最後に囁く。

「少し大人になった君は、きっと笑顔で許せるから」

酒は天の美祿なり。

罪深い甘い罨は、真っ白な少女を瞬く間に染め上げる。世に蔓延る汚れを知らない少女は『嘘』を知る事で大人へと近づくのだった。



そこは、もぬけの殻とかした編入試験会場。一人の老人が『化けるふりかけごはん』に箸をつける。

「……………」

老人は口角を上げ、一枚の書類に目を通す。

『幸平創真。不合格』

老人は書類を握り潰す。この紙が塵芥と化した今、試験官の下した合否は反故になったのだ。

「遠月は料理こそが全て。才能ある者らには、皆平等に機会が与えられる。料理人としての気概……見せるが良い」

独り言ちた老人は人知れず笑みを浮かべる。満足した彼が退室しようとした時……別の書類が彼の目についた。

『山崎響、合格』

老人は書類を燃やした。

「ただし山崎、貴様はダメだ」

後日、父親に対する言い訳を必死で考える創真の元に一通の合格通知が届いた。一方で、ウツキウキで果報を寝て待つ響の元に合格通知が届く事はなかった。

属毛離裏のスコッチウイスキー

山崎響は激怒した。必ず、かの邪智暴虐の総帥を除かなければならぬと決意した。響には人としての倫理がわからぬ。響は生粋の遊び人である。口笛を吹き、女と遊んで暮らして来た。けれども正義に対しては、人一倍に敏感であった。

「あのジジイ何か小細工しやがったな」

響は確信していた。あの流れで編入試験に合格しないのはどう考えてもおかしいと。理事長である薙切仙左衛門が、何かしら裏で手を回している。しかし、理事長である仙左衛門が最終的に試験官の可否を承認する事を鑑みれば、小細工もクソもなく、単純に山崎響という人物が遠月茶寮料理学園に相応しくないと判断を下されたというだけの事である。女の事しか頭がない響にはそれが分からなかった。

「ああああああ！えりなとイチヤイチャしたかったのに！緋沙子とイチヤイチャしたかったのに！まだ見ぬ遠月女子とイチヤイチャしたかっただけなのに！人の自由を剥奪しやがって！性愛の自由を剥奪しやがって！許さんぞ！」

響は怒りに任せてシェイカーを振る。しかし、ここは Heaven's gift" に来客はただの一人もおらず、専ら自分がヤケ酒をする為にカクテルを作っている。

カクテルグラスにシェイカーの内容物を注ぐ。響が作ったカクテルとは、スコットランドジン『ヘンドリッククス』を使ったアーティラリー・マティーニである。

ヘンドリッククスが持つ独特のフレーバー、そして最大の特徴である胡瓜と薔薇の香りを殺さない為にも、加えたベルモットはごく少量。マティーニのドレスアップとしてお馴染みのオリーブも沈めない。

響は自らが手がけた、素材の味を前面に押し出したマティーニを呷る。

「最悪の仕上がりだな」

出来はイマイチだった。

マティーニはシェイクせず、ステアして作るのが一般的である。その定石を外したアーティラリー・マティーニは、シェイクする事によって口当たりや丸みを持たせるといふ、製法にアレンジを加えたレシピーである。

シェイクというアーティラリー・マティーニにとって重要な工程をヤケクソに行っているのだから、至高の一品などできるわけもない。更にイラつく響は、結局ヘンドリックスをストレートで飲み始める。もはや接客する気などゼロである。

しかし、世界というものは天邪鬼なものであり、マーフィーの法則という言葉あるように、いつだって自分の望まない結果に転がる。ひとり酒とたらしこむ響に水を差すように、来客を知らせるベルが揺れる。

「チツ……………いらっしやいませ」

入ってきたのは男性客で、30代後半の日本人顔をした男性客だった。スタイルは良く、顔もかなり整っている。

しかし、その見た目に反して、彼の口からは訛りの強いスコットランド英語が放たれた。

「なんだ、店主も客も居ねえのかよ。なんでガキがひとりでに酒飲んでんだ？赤字にするのが趣味みてえだな、この店」

一見の客に舐められる事など日常茶飯事であり、特に気にも留めない響は男性客に倣ってスコットランド英語で返す。

「……………街へ行けばいくらでも他の店が有りますよ。大して可愛くもない女と喋りながら、水で薄まった高級酒を飲みたいのなら、そちらをおススメします」

「大口叩くじゃねえか。不味い酒を出しやがったらホモのハッテン場に打ち込むぞ」

憎まれ口を叩いてはいるものの、男性客はカラカラと笑いながらカウンターの座る。

「しっかしまあ、寂しいバーだな。綺麗な姉ちゃんどころか、薄汚いおっさんすらいねえじゃねえか」

「いつもは賑わっているんですけどね。昨夜、常連さん達がいつも以

上に出来上がっていたので、奥様方にこつ酷く叱られたんじゃないですかね」

「そいつぁ幸せな事だ。で、綺麗な姉ちゃんは？」

「居たらCiosedにしますよ」

「とんでもねえマセガキだ。バーテンダーはどいつもこいつもロクでもねえな」

実のない会話に飽きた響はおしぼりを差し出し、メニューを軽く小突いて注文を促す。

「お前さんのオススメで」

「SALMARIでよろしいですか？」

「ブチ殺すぞ」

「冗談です。では無難にスコッチで」

響は封の切られていないボトルを下ろし、ラベルを偽っていない事を確かめるよう男性客に手渡す。

「……いきなりサラの高級酒を出す奴が居るか？」

「ホモに食われるのは嫌ですからね」

響が下ろしたボトルは『ジョニーウォーカー ブルーラベル』。熟成の頂点に達したモルトだけでブレンドされた、美酒である事が約束されたスコッチウイスキーである。

「こんなもん、行きずりの客においそれと出すんじゃないやねえよ。父ちゃんの誕生日プレゼントにでもくれてやれ」

「私が生まれてすぐ、父は難病を抱えた母と共に渡米したと聞いています。私の育ての親とも言える、この店の前のマスターも数年前に亡くなりました」

「おっと、言い辛い事を聞いちゃったな。ガキひとり残して海外に行くったあ、非情な親がいたもんだ」

「別に恨んではいませんよ。そこにどう言った理由があったのかは知りませんし、知ろうとも思いません。この環境で育ってきたからこそ、今の私がいる。酒と女と歌を楽しむ権利を与えてくれただけでも、顔も知らぬ両親にも頭が上がりません」

「本当にマせてんな。……こいつぁ思ったより美味しく酒が飲めそう

だ」

ラベルが偽装されたものでない事を確認した男性客は、響にボトルを返す。

「一杯目はトワイヌアツプ対でよろしいですね？」

「新品だしな。お前も飲めよ」

「……よろしいのですか？」

「孤児がひとり寂しくジンをガブ飲みしてるのを見せられたら、極悪人ですら仏になるっての。俺が来るなり舌打ちしやがったのは大目に見てやる」

「……恥ずかしい所を見られてしまいましたね」

あまり他人に優位を取られる事に慣れていない響は、どこかやり辛さを感じながらジョニーウォーカー ブルーラベルをグラスに注ぎ、もつとも香りを引き出す割合で加水する。

「Slainte 乾 mhatth 杯」

二人はグラスをぶつける事なく、各々の口へとグラスを運ぶ。お互いが口にした酒の感想など言葉にするまでもなく、広がる余韻を黙って嗜む。

「……少年よ。なんであんな酒の飲み方をしていたんだ？」

おもむろに、響がヤケ酒をしていた事を男性客が尋ねると、響は思いついたように顔を顰める。

「……先日、日本で高校の編入試験を受けてきたんですよ」

「あ？自分の店持つてんのに、わざわざ日本まで行ってそんな事してきたのか？なんて学校だ」

「お客様が日本人なら知っているかと思いますが、遠月茶寮料理学園という学校です」

響が校名を告げると、男性客は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をすする。

「おいおいマジかよ。そいつあ俺の母校だぞ」

「……本当ですか？」

「嘘を吐いて良いのは、女を泣かせないようにする時だけだ。こんなしょーもない事で嘘を吐いて、一体何になる。……んで、ヤケ酒して

たつて事は試験に落ちたのか？」

グラスを空にした男性客が尋ねると、響は溜息混じりにジョニーウォーカーを注ぎつつ、事の顛末を吐露する。

「……いや、受かったはずなんですけどね。試験官は実に可愛いらしい女性徒で、試験の一環として私が出した一品は、確かに彼女の心を掴んだ。この私が逃すはずもない。なのに落ちた。悪の見えざる手によって合否を操作されたとは思えない」

「……んな事があるのか？ 仮にそうだとしたら、お前さんブラックリストに入ってたんだろ。一体何をやらかしたんだ……」

呆れた様子で男性客が問うと、響はジョニーウォーカーを呷りつつ、忌々しげに呟く。

「私がやらかしたわけではありませんよ。かつて遠月に在学していた、私の父が女を食い荒らしていたそうです。その血筋というレッテルだけで落とされたに違いありません」

無論、レットルだけで落とされた訳ではなく、響自身も無視できないレベルの問題を抱えているため、仙左衛門は響の合格証を燃えカスに変えたのだが、己を省みぬ響にはそれが分からなかった。

「……その情報だけで特定できるつてのも、なんとも皮肉な話だな。涙が出てくるぜ。お前の父ちゃん、山崎余市だろ」

「父を……存知なのですか？」

「ご存知も何も、そいつの事は俺が一番よく知っている。堂島さんや才波さん、薊などといった、十傑の座を欲しいがままにしてきた『極星寮』の寮生の一人だからな。まあ、あいつは女絡みで謹慎処分食らいまくってて、十傑には入ってなかったが」

男性客はグラスをカウンターに置くと、懐かしむように目を細める。

「あの頃は本当に楽しかった。極星寮生が歩くだけで、モーセの海のように道ができ、女たちの黄色い声があがる。まさに極星寮の黄金時代さ。蓋を開けてみればキチガイとサイコパスの巣窟だったのに」

「……ですが、それだけの実力を持った人たちが集っていたと言う事ですよね？」

「当然。堂島さんと才波さんのツートップはまさに敵なし。彼らに料理で敵う者など、ただの一人もいなかった。そして、その後ろをウロチョロと付いて回っていた薊も、メキメキと力をつけて第三席を勝ち取りやがった。部屋に引きこもって香辛料の研究ばっかしてたチビッコ処女もいたっけか。……どいつもこいつも料理に狂ってて、話を聞かない奴らばっかだった。寮母がふみ緒さんじゃなかったら、大半は退学処分食らっててもおかしくなかったね」

男性客は満足げに目を伏せ、グラスを傾ける。戻らぬ青春を懐古するかのように、ジョニーウオーカーの完成された味わいを堪能する。

「……山崎余市という男は、どうでしたか？」

父親の過去に対する興味を隠そうともしない響が尋ねると、男性客は苦々しげな表情を浮かべる。

「……あいつの事を思い出すと胸糞が悪くなる。良い酒を飲みながら話したくはないんだがな……」

「ほんの少しだけ安くしますよ」

「クソツタレが。……あいつはとにかく女に目が無かった。極星寮の女は勿論、全学年の可愛い女子を料理で虜にしては、ふみ緒さんの目を盗んで部屋に連れ込んでいた。酷い時は遠月の教員までたぶらか誑す始末だ。一番やばかったのは、食戟の審査員として来ていた、良いトコのお嬢ちゃんに手を出して、それが親父さんにバレた時だったな。今でも覚えてる。顔真つ赤にして『山崎余市を出せ。俺がぶっ殺してやる』って、極星寮に乗り込んで来たもんだから、寮生一同阿鼻叫喚よ。ふみ緒さんのお陰で事なきを得たが、警察沙汰になったから忘れるわけもない。あいつが手を出したのは、高級料亭の跡取り……確か『くら季』の娘だったか？まあ、今となっては笑い話だが……おい、お前さん顔真つ青だぞ、どうした？まさかもう限界なのか？」

終始興味深そうに男性客の話を聞いていた響が、急に顔面蒼白になり今にも吐きそうな顔になる。不審に思った男性客が調子を訊くが、響は首を横に振るだけだった。

「……まあそんな感じで、女癖の悪さでその名を知らない奴はいない程だった。『退学しろ』なんて食戟の申し込みはまだ可愛いもので、

『去勢しろ』つつう、身も蓋もない要求の食戟を、毎日腐るほど申し込まれていた」

(血は争えないな……)

遺伝子の罪深さをしみじみ痛感する響だったが、何も言わずに続く言葉を待つ。

「だが、あいつは卒業するまでただの一度も食戟を行わなかった。料理は女を落とす為の手段に過ぎないつつて、女にしか腕を振るわなかったからな。ただ、その腕前は十傑のトップにいた才波さんや堂島さんをも超えていた」

「勿体無いですね。まともにやっていたられば主席になれたでしょうに」

「んな事、あいつは耳にタコができるほど言われてたさ。その度に『女の為に作ってるから美味しくなるんだよ。野郎は母ちゃん味の味噌汁でも食ってろ』って返してて、男に料理を出そうって気は全くなかったな」

これには流石の響もドン引きだった。響は客が命の業界で生きてきたのもあつてか、相手が男だからと言って、提供する酒や料理を蔑ろにした事はない。それは響の育ての親である前のマスターの教えに背く行為でもある。もつとも、そんな響も女に飲ませる酒の方が、男に出す酒より神経を使っている事実は否めないが……

「よく分からん口癖が多かったよ、あいつは。『俺は死ぬまで結婚しない』とも言ってたな。そんな奴が奥さんどころか子供作ってたんだから傑作だよ」

「……そんな事を言っていたんですか？」

「ああ。なんでも、『俺は命尽きるまで、未だ見ぬ美女を味わい続けたい』……とかほざいてて、結婚はそのロマンをかなぐり捨てる愚行だとかなんとか言ってたよ」

「さすがは『性欲の権化』ですね」

「……なんでお前が知ってたんだ。どこで聞いたんだよ、そのあだ名」

「薊さんもこの店に来たことがあるんですが、その時に少し」

響が薊の名を出すと、男性客は驚きに目を丸める。

「なんだ、あの美食バカもこんな店に来てたのか」

「こんな店で悪かったですね。今まで飲んだジョニーウオーカー返していただけませんか？」

「怒るなよ。あいつ、元気にやってたか？」

「娘に嫌われて情けないツラしてましたよ」

「そいつはお気の毒に。ジョニーウオーカーが最高に美味くなつたぜ」

さらつと畜生極まりない発言をする男性客だったが、美少女のえりなを自分と会わせようとしなかつた薊にブチ切れていた響は、特に同情する事もなかつた。

「……ところでお客様は、ご結婚なさっていますか？」

響の唐突な質問に、男性客は首を傾げて答える。

「ああ、一応妻はいるが……」

「奥様は美人ですか？」

「……おい、余市の息子よ。お前さんまさか、ガキのクセして俺の女に手出そうなんて考えてないだろうな？」

「考えてませんよ。ですが、重要な事なので」

「どんだん意味が分からなくなってるぞ。そんな事をお前さんが知って何になるってんだ」

「会わせろとは言っているわけでも無いんですよ？美人かどうかだけ教えるくらい良いでしょう」

「しつげえな。そんなもん、美人に決まってるんだろ。俺にはブスがお似合いだとしても言いたいのか？」

男性客の答えを聞いた響は、どこかスッキリとした顔で返す。

「そんな事は思ってませんよ。……ですが、女性は顔だけじゃないでしょう」

「んなわけあるかボケ。取って付けたようなタテマエほざいてんじやねえぞガキ。ブスに人権なんかねえよ」

「スコットランドの恥ですね、お客様は」

「……性格の良いブスと性格の悪い美人。お前だったらどっちを抱く？」

「性格の悪い美人ですね」

「人の事言えねーじゃねえかぶつ飛ばすぞテメエこの野郎」

男性客の口から出る言葉は非常に攻撃的なものではあるが、その顔はどこか愉快そうに笑っていた。

「しかしまあ……顔も性格も若かった頃の余市に似てんな、お前。……息子が気丈に頑張ってるつてのに、余市のやつは何やってんだつて話だよ」

男性客がポツリとこぼした言葉に、響は僅かに声のトーンを落とし、て反応する。

「さつきも言いましたが、別に私は両親を恨んでなどいません。体が弱いながらも腹を痛めて私を産んでくれた母は言うまでもありませんが、母の難病を治すために父が死力を尽くしていたのなら、私は彼を恨んだりはしません。……ですが、母を等閑にして他の女と遊んでいたら、私は絶対に許しません」

男性客は目を細め、響の双眸を覗き込む。

「へえ……いかに女と遊んでそうなお前さんが、そんな事を言うのか」

「私は複数の女を愛した事こそあれど、女を弄んだ事はありません。そして、その愛は平等でないといけませんし、愛に序列があつてはいけません。故に、子供を作ると言う行為は、これまで愛してきた全ての女を裏切り、ただ一人の女を愛する事を誓うということです。それ以降、その一人の女以外に手を出すのは、女を弄ぶ行為であり、裏切りに裏切りを重ねる事になります。そんな奴は男でも人間でもなく、只の屑です」

響がそこで言葉を切ると、男性客は深く息を吐く。そこに込められた意味など、響には分からなかった。

「……ケツの青いガキが随分語るじゃねえか。まあ安心しろ。余市が『俺は死ぬまで結婚しない』と言っていた理由を考えれば分かるだろう?」

「分かってますよ。腐っても私の父ですからね」

「信頼されてるねえ。若かった頃の余市とは大違いだ。……ちなみにお前さん、女がする不倫はどう思う?」

男性客の質問に、響はくだらない事を訊くなど言いたげに顔を顰める。

「どう思うも何も、不倫される男がマヌケだとしか。自分がただひとりと決めた大事な女の心も掴んでおけないような男は、童貞以下ですよ。そんな雑魚は不倫されても文句は言えませぬね」

「……ククツ……そうかい……クハハハハハハハ！」

男性客は堪らないと言った様子で、カウンターをバシバシと叩きながら笑い始める。

「……こちら真面目な話してんのに何笑ってるんですか？しばくぞテメエ」

「悪い悪い、あの頃の余市が言っていた事と全く一緒だったから、可笑しくて仕方なかったんだ。誰が育てても、結局親に似るもんだな」

男性客は再び愉快そうに笑うと、グラスに残っていたジョニーウォーカーを飲み干す。

「いやあ、懐かしい話もできて最高の酒だったぜ。チエツク頼むわ」「それは重畳。代金はこちらです」

代金を支払った男性客は鞆をひっ掴み、椅子から立ち上がる。その動作に未練は無かった。

「じゃあな、余市の息子よ。お前さんなら心配いらんと思うが、強く生きろよ」

「……お待ちください。まだお客様の名前を伺っておりません」

男性客は名乗るつもりは無いとでも言いたげに、ひらひらと手を振る。

「名乗るほど大層立派な名前は持ってねえよ。男の名前を訊く労力があつたら、女の一人や二人でも口説いてこいつての」

男性客の答えに、響はどこか可笑しそうに小さく笑う。

「……どこかで聞いたセリフですね」

「あん？」

「こちらの話です。……ですが、名前を教えてくださいただかないとボトルキープできません」

「そんな事かよ。残った酒はお前が飲め。二度とこの店には来ねえか

らよ」

男性客は素っ気なくそう言い放つと、出口のドアに手をかける。しかし、男性客が出て言ってしまう前に、響は日本語で男性客を引き止める。

「そんな水臭い事を言わないでくださいよ。貴方には元気がなくなった美人の奥様を、この店に連れて来てもらわないといけませんからね」

男性客はドアノブにかけていた手を離すと、何かを隠すように己の顔を覆う。

「……いつから気づいてた？」

男性客……山崎余市がそう問うと、彼の息子は残り少なくなつた『ジョニーウォーカー ブルーラベル』を掲げる。

「マスターから聞いていましたからね。私の父は、学生の頃からジョニ黒ばかり飲んでいたと。このボトルを見せた時、貴方は隠しきれないほど嬉しそうな顔をしていた。そんな人が山崎余市なる人物を懐かしそうにペラペラと喋っていたら、サルでも察しがつきますよ」

「はっ、こいつあ一杯食わされたな。これじゃただのピエロじゃねえか。本当……ぶん殴りたくなつてくるな、お前」

「人の事言えませんよ。私も、貴方と話していてぶん殴ろうか何度迷つたか分かりません」

「チツ、蛙の子は蛙だな」

「諸刃の剣ですよ、それ」

余市は小さく笑うと、再び響に背を向ける。

「安心しろ。お前の母ちゃんの病気は治った。今は予後観察中だ。元気に動けるようになったら連れてくる。……ところで、なんで俺だつて分かつて、奥さんは美人か……なんて訊いてきたんだ？」

「自分の母親がブスだと羨めるじゃないですか」

「ハハハッ！ぶっ殺したくなるくらい親父に似てんな、お前。母ちゃんの遺伝子は一体どこに行つちまつたんだつてくらいによお……ま、せいぜい楽しみにしとけよ。いくら女が好きだからって、テメエの母

ちゃんには手え出すなよ?」

「八つ裂きにすんぞクソ親父。俺にも絶対に超えちゃいけないラインくらいあるわクソツタレ」

「誰がクソ親父だエロ息子。テメエ、ちよつと俺を欺いたからって調子乗ってんじやねえぞ?近い内に、赤っ恥かせてやるからな。覚悟しとけよクソツタレ」

「そいつは楽しみだ。気をつけて、親父」

「……………おう。元気でやれよ、響」

別れを告げた余市は、何かから逃げるようにして店から出て行く。そんな父親の後ろ姿を見送った響は、飲みかけの『ジョニーウォーカー ブルーラベル』に父の名を刻む。

「女の趣味まで一緒とか……………気持ち悪いんだよクソ親父」

酒は天の美祿なり。

父が愛した酒を、父と共に飲んだ少年は、生まれて初めての反抗期を迎えるのであった。



「お久しぶりっす……………堂島さん。元気にしてましたか?卒業して以来っすね。……………俺はいつでも元気っすよ。家内も元気になりましたし……………浮気?するわけないじゃないっすか。数多の女を虜にしてきたこの俺を虜にした女なんですよ?浮気なんてする気にも

なりませんよ。堂島さんも早く相手探さないと行き遅れますよ。
……ああ、タイムリーな話ですね。つい最近に行ってきたんですよ。……ええ、若い頃の俺にそっくりなクソガキで、若い頃の俺よりも立派に育った男でした。あいつには辛い思いをさせたと思いますし、俺が親を名乗る資格は無いとは思いますが……あいつをマスターに任せたのは間違っていたと確信しています。難病を患った母を気遣い、過去の女から逃げ惑うように生きる俺について行くのは、あまりにも窮屈すぎる。男は何物にも縛られず自由に生きた奴ほど、でっかい器を手に入れられるですよ。……そう、才波さんのようにね。薊の馬鹿にも見習って欲しいくらいだ。……代わりに、女は自分の手元で大切に育ててあげなくてはいいじゃないか。……ははっ、そんなの、俺が女好きだからに決まってるじゃないですか。堂島さんは真面目すぎるんですよ。あいつのバーにでも行って息抜きしたらどうですか？……え？違いますよ、スコットランドっす。……ハハハハハ！堂島さん学生の頃から忙しそうでしたもんね。才波さんが仕事しないから。……ええ、そうですね。またどこかで会いましょう。才波さんも、薊も呼んで。……良いですよ、俺が作りましょう。楽園の管理者なんて呼ばれてたんですからね。今の才波さんに勝てるかどうかは微妙ですが、堂島さんよりは美味しい自信ありますよ？……何言ってるんですか、今は男にも料理くらい作りますよ。

……もう胃袋を掴んで女を落とす必要はありませんからね。俺がすべき事は、たった一人の女の心を掴み続ける事なんですから」

精密射撃のショットガン

「で、話って何ですか堂島さん。この合宿ももう終わりが近い……これ以上俺たちがすべき事など残っていないように思えますが?」

富士山と芦ノ湖を一望できる避暑地にそびえ立つリゾートホテル『遠月離宮』。そこには遠月学園の一年生たちが集い、『無情の篩い落とし宿泊研修』と恐れられてやまない合宿が行われていた。

遠月リゾートの総料理長兼取締役員である堂島銀は、特別講師として招いた遠月学園の卒業たちを一室に呼び出していた。第79期卒業生にしてパリにフランス料理店『SHINO, S』を構える四宮小次郎が、床に就こうとしていた所に召集をかけられた不快感を隠す事なく、真つ先に堂島へ噛み付く。

「まあ落ち着け、四宮。……卒業生諸君、今回の宿泊研修のゲスト講師を務めてくれてありがとう。君たちが作った料理は、さぞや生徒たちにとって良い刺激になった事だろう。そんな君たちに一つ提案がある」

そこで一旦言葉を切った堂島は、卒業生一同を見渡す。そして、彼はなぜか四宮に視線を固定させ、二の句を継ぐ。

「スコットランドへ行ってみないか?」

「……………」

一同が声も出ないと言った様子で唾然とする中、『リストランテ エフ』の水原冬美が、冷え切ったジト目で堂島を見る。

「……………なぜスコットランド?」

「みんな自分の店を持って忙しいのは重々承知……余裕のある者だけで良い。だが四宮、お前は強制だ」

「……………あ?」

堂島の理不尽発言を前に、ヤクザのようなドスの効いた低音ボイスを漏らした四宮が、人を殺せそうな目で堂島を睨めつける。

「堂島さん、俺には新たな目標ができた。海外旅行に現を抜かしてる暇なんて……」

「まあ落ち着け。つい最近、俺が遠月の生徒だった頃の後輩から連絡

があつてな。そいつの息子がスコットランドでバーテンダーをやっているそうなんだ。……停滞していた四宮が次の道を見だし、士気を高めるのは大変喜ばしい事だが、一度お前は凝り固まった肩と頭をほぐした方が良い。常に気張り続けられる人間なんていないからな」堂島が静かに諭すものの、そんな言葉で納得のできる四宮ではなかった。

「堂島さんの後輩とは言え、俺たちからしてみれば赤の他人です。そんな人の息子が開いている店に行けと言われても……な？」

四宮はやれやれと首を振ると、同意を求めるようにして横にいた乾日向子へ視線を送る。

「へえ……スコットランドのバーですか。なんだかお洒落ですね！行きましょう四宮先輩！」

「お前は黙つてろヒナコ！」

「はあ!?!じゃあなんでこっち見たんですか!?!」

ギャーギャーと稚拙極まりない喧嘩を始める二人を放置し、オーベルジュ『テゾーロ』のドナート梧桐田が堂島に疑問を挟む。

「……堂島さん、四宮さんの言う事にも一理あります。その堂島さんの後輩とは、一体どういった方なんですか？」

「俺より美味しい料理が作れる男だったな」

堂島がそう答えると同時、日向子にアイアンクローをかけていた四宮がピタリと動きを止める。

「……主席だった堂島さんより料理が上手？随分な謙遜を仰るんですね」

「謙遜じゃないさ。奴の料理を一度口にしたら、誰しもがその男から離れる事ができなくなるほどだぞ？まあ、女にしか作らないから媚薬飯だの麻薬飯だの言われていたが……」

「ただのやべーやつじゃないですかそれ」

堂島が懐かしむ様に微笑むが、大雑把な説明だけでも危険人物と察しがついた卒業生たちはドン引きしていた。

「彼に負けず劣らず、その息子もなかなか面白い人柄をしているそうだ。今まで何の連絡もよこさなかったその男が、息子の店に行つてす

ぐ俺に電話をかけてきたくらいだ。人を大きく動かす影響力があるのだろうな」

堂島はゆっくりと四宮に歩み寄ると、激励するように優しく、叱咤するように力強く、彼の肩を叩く。

「強制……と言ったが、あれは冗談だ。お前のこれからはお前が決める事だからな。だが、これだけは言っておく。今、お前は人生における大きな岐路に差し掛かっている。思い切って立ち止まり、自分を見つめ直したお前は、きつとデカイ料理人になれるだろう……いや、必ずなれる。そうして大きくなった料理人を一人、俺は知っているからな」

レンズ越しの四宮の鋭い視線が、堂島を射抜く。堂島の言葉が、如何に真剣に考えて紡がれたものかを悟らされた四宮は小さく嘆息する。

「……分かりましたよ。店のスタッフにはそれらしい言い訳を覚えておきます。全く……自分の店を何日も放っておく心労を知って欲しいですね。あいつらも俺がいないと不安で仕方ないだろうし」

「……水原先輩、聞きました？物自惚れすぎですよ、あのナルシスト先輩」

「……性格の悪いオーナーが不在で、今頃ドンチャン騒ぎしてるんじゃない？」

「聞こえてんぞお前らア！」



そこは片田舎にそびえ立つ小洒落たバー"Heaven's gift"。いつもは大勢の酒飲みで満員御礼のそこは、週始めということもあってか客の一人もいなかった。

「暇くや」

何もする事がない店主の山崎響は、カウンターに頬杖をつき、すで

に三回は読んだ朝刊に目を通していた。

忍び寄る睡魔を振り払うべく、響はうんと背伸びをして、ただの文字の羅列と化した朝刊をゴミ箱に放り込む。一度小さく欠伸をした彼は、密閉容器に入れておいたコーヒー豆『ブラジルサントスNo2 #18』と『ベトナムアラビカ』を冷蔵庫から取り出す。

それぞれをコーヒーマルで挽き、いつもの割合でブレンドしたものをドリッブする。深いコクと強い苦味が特徴的なこのブレンドは、昼夜の逆転した響にとって心強い味方であった。

響が眠気ざましのコーヒーマルをちびちびと飲みつつ店のドアを睨みつけ初めて小一時間、二人の客が店に入り込んでくる。

「……つたく、こんな僻地にあるなんて聞いてねえよ。現地人の案内も訛りが強くて分かりにくいし」

「まあまあ四宮先輩。何とか着いたんですし良かったじゃないですか」

「ああ、ヒナコがいなかったら気持ちよく酒が飲めただろうにな」

「何ですかそれ!?先輩一人じゃ心配だから着いてきてあげたのに!」

「お前が勝手に付いて来ただけだろうが!だいたい、お前が通りすがりの小娘に声かけて警察沙汰になつてなきや、もつと早く着いてたんだぞー!」

「うふふ……さっきの娘……私好みの可愛らしい子でしたね……」

「国際問題を起こす前に国へ帰れ」

「痛い痛い。そろそろ私の頭蓋骨が逝きますよ先輩」

入店するなり喧嘩を始めた、アシンメトリーの赤髪が特徴的なメガネをかけた男と、ワガママな体つきをしたおさげの女は、どちらも日本語で喋っていた。

「……最近日本人がよく来ますね。Heaven's giftへようこそ」

彼らに倣って響が日本語で二人を歓迎すると、両者とも異なった反応をする。

「日本人……というかまだ子供じゃねえかこいつ。堂島さんの後輩の息子だって時点で怪しくはあったが」

「先輩、あの子すごいイケメンですよ！イケメンバーテンダーさんですよ！」

二人の温度差の激しさに苦笑いを浮かべる響は、席に着くよう二人に促す。

「カウンターへどうぞ」

「……テーブルが空いてるだろ。なんでわざわざカウンターなんだ？」

「美しい女性が目の前に居てくれた方が、より良いお酒が作れるので」「聞いたかヒナコ。こいつ絶対女誑しだぞ。大人しくテーブルに……」

響の気障ったらしい文言に胡散臭さを感じた四宮がテーブルで飲む事を提案するが、日向子はすでにカウンターに座っていた。

「あなた、とても良い事を言いますね。是非とも美味しいお酒を作ってくださいいね。うふふ……」

「勝手に座ってんじゃねえぞヒナコお！」

自由奔放すぎる日向子に牙を剥く四宮だったが、彼女がカウンターから動こうとする気配は微塵もない。諦めた四宮は日向子の隣に腰掛ける。

「まるで脈なし……久しぶりですね」

「あ……う？」

どこか達観した様子で何かを呟く響を、不審に思った四宮が声をかけるが、響は首を振るだけだった。

「お気になさらず。さて、SHINO, sのオーナーシェフが来たとなつては、出来ない物を出せませんね」

響がわざとらしく対応を変えると、四宮は怪訝そうに眉を顰める。

「なんだよ、俺の事知ってたのか」

「先輩もすっかり有名人ですね」

「私はここが国籍になってますが、血筋は純粋な日本人ですからね。同じ日本人が欧州で活躍していて気にならないはずがありませんよ。たしか、レギユムの魔術師……でしたっけ？」

響が確認するように尋ねると、日向子が堪らずといった様子で吹き

出す。

「……………ぷっ。いつ聞いても名前負けしてますよね、先輩」

「ヒナコ、いちいち茶々入れてくるならつまみ出すぞ」

「それは良い提案ですね。日向子さん、どうやら彼は一人でお酒が飲みたいらしい。私と綺麗な夜景の見えるレストランにでも行きませんか？」

「まあ……………素敵ですね。先輩、しばらくそこに居て良いですよ」
「会って数分で打ち解けてんじゃねえぞお前らあ！」

熱い視線を交わす二人に、四宮は青筋を浮かべて怒鳴る。息抜きに来たはずの四宮だったが、彼のストレスは溜まる一方だった。

「冗談はさておき、お二人は何を飲まれますか？特に思いつかないのならばお手元のメニュー表もご覧ください」

「んー……………じゃあ私はマスターのおすすめで。先輩はどうしますか？」

「……………」

ヒナコに注文を催促された四宮は、無然とした表情で黙り込む。後輩の手前、それなりに格好がつくよう好みの酒を唱えたい四宮だったが、寝ても覚めても料理に明け暮れて来た彼は、食中酒や食前酒として出すワインならともかく、自分の嗜みとして飲む酒を知らない。

「……………俺もおすすめで」

結局、これと言ったものが思い浮かばなかった四宮は、日向子に倣って響に判断を委ねる事にした。

「折角スコットランドにお越しいただいたので、お二人には是非ともスコッチを堪能していただきたいですね」

注文を承った響はカクテルに使用する材料を準備していく。スコッチ、ホワイトキュラソー、ブルーキュラソー、ライムジュース……と、流れるような手際の良さでシェイカーに材料と氷を入れる。

誰もがバーテンダーのイメージとして思い描くであろう、シェイクの動作。それは、決してパフォーマンスのために大げさに行われていくわけではない。比重や味わいに大きな差がある材料同士を混ぜ合

わせるにはシェイクが必要不可欠なのだ。

シェイクという動作は、攪拌と冷却と加水を同時に行っている。いずれもカクテルの仕上がり大きく影響する要素であり、ただ闇雲に振るだけでは味の均質化は望めない。バーテンダーがシェイカーを振るのと、素人が真似事でシェイカーを振るのとは訳が違う。

そして、まるで動きが染み付いているかのようにシェイカーを振る響が、後者でない事を四宮と日向子は否応なしに実感させられる。そんな二人の視線など気にも留めない響は、カクテルグラスにシェイカーの内容物を注いでいく。

「綺麗……………」

日向子が思わず息を呑むのも無理はなく、カクテルグラスに注がれたそれは神秘的なエメラルドグリーンに輝いていた。批判の言葉ばかり用意していた四宮ですら、言葉を失う他なかった。

「キングス・バレイです。1986年に開かれた第一回スコッチウイスキーカクテルコンクールの優勝作品として輝いたカクテルで、制作者はなんと私たちと同じ日本人です。我々日本人が誇るべきカクテルをご堪能ください」

目を輝かせた日向子がカクテルグラスを持ち上げ、四宮の方へ突き出す。

「じゃあ、先輩の健闘を祈って……乾杯！」

少し照れ臭かった四宮は鼻で笑うものの、控えめに自分のグラスを寄せて、日向子が取った音頭に応じる。二人が同時にグラスを傾ければ、スコッチウイスキーが持つフルーティーな味わいと、柑橘系の爽やかな後味が二人を満たしてゆく。

「ん〜っ！とても飲みやすいカクテルですね！私あんまりウイスキー飲めないですけど、これなら何杯でもいけそうです」

「……………」

元々、女性にとっても飲みやすいカクテルであり、日向子は上機嫌にキングス・バレイを呷る。四宮も感想こそ口にしなないものの、その表情に不満の色は窺えない。

「スコッチのウッドテイストな琥珀色を、妖艶に輝くエメラルドグ

リーンに変えるには、絶妙な配分調整を強いられます。このカクテルの制作者が『色の魔術師』の名で讃えられる所以とも言えましょう。彼がバーテンダーたちの憧れとなった様に、『レギュムの魔術師』の名を冠する四宮さんも、料理人の憧れとやらなくてはなりませんね」

四宮に重圧を掛ける訳でもなく、響はどこか冗談めかしてそんな事を言う。

「……俺は自分の実力を証明するだけだ。羨望の眼差しなんぞ求めてねえ。欲しい物は三つ星……ただそれだけだ」

四宮は、己の中で滞留している全てを飲み下すようにして、キングス・バレイを飲み干す。この時ばかりは、日向子が彼を揶揄う事などなかった。

「先輩ならできますよ。あの日、先輩は私に『フランスで絶対成功する』って宣言して、それを現実にしたんですから」

言って、少しだけ俯く日向子は、どこか嬉しそうな表情をしていた。

「……んな事言ったか？」

四宮が本気で分からないとでも言いたげな顔で首を傾げると、日向子は表情を180度反転させ、烈火の如く怒り狂う。

「はあ!?あの時の事も覚えてないとか、どれだけフラグクラッシュャーなんですか先輩は!?馬鹿!唐変木!童貞!」

「ああん!?ど、どどど童貞じゃねえし!テメエに言われる筋合いねえぞこのガチレス処女!」

「なっ……最低!この変態先輩!」

「お二人とも、お洒落なカクテルはお洒落に飲んでこそ……ですよ」
飽きもせず不毛な言い争いを繰り返す二人に呆れつつ、響は何やらフライパンなどの調理器具を取り出し始めた。興味がそちらへ向いた四宮と日向子は一時休戦とし、響の行動を目で追い始める。

古くからスコットランドの主食として親しまれてきた燕麦えんぱくを粉状にした物『オートミール』をフライパンに広げ、火にかける。わずかに色が変わり、燕麦の香ばしい匂いが立ち上り始めたのをサインに、響は火にかけていたオートミールを皿に広げる。オートミールが冷めるまでの間、丁寧に生クリームを立てていく。

十分に冷ましたオートミール、ヘザーハニー、スコッチウイスキーを生クリームをホイップしていたボウルに投入する。

ラズベリーの層と各種材料を混ぜ合わせた生クリームの層を交互に重ねるようにして、パフェグラスへ盛り付けていく。仕上げにオートミールをわずかにふりかけ、ミントとラズベリーを飾りつける。

「スコットランドの名産品ばかりを使った伝統的なデザート『クラナハン』です」

物珍しいスコットランド料理を目の前に出され、百選練磨の料理人である四宮と日向子ですら顔を輝かせる。……否、二人が熟練の料理人であるからこそ、調理の行程を見ていただけでその完成度の高さを理解してしまうのであろう。

「見て下さい先輩、すぐくお洒落ですよこのデザート！インスタにあげなきゃ……」

日向子がキヤツキヤと燥ぎはしやながらクラナハンをスマホで撮影している傍ら、対照的に四宮は不機嫌そうに眉間に皺を寄せていた。

「おいクソガキバーテンダー、なんで一つしか作ってないんだ？」

「ちゃんと二人分の量にしていますよ」

「……器が一つなのは百歩譲るとして、スプーンも一つしかねえぞ」

「申し訳ございません、生憎とスプーンはそれしかありませんので」

「そんな訳ないだろ。スプーンが一つしかないだなんて一般家庭でもそうそうないつてのに、ここはバーだぞ？ 商売舐めてんのかテメエ」
「チツ……：昨夜、全部へし折ったので」

「おい、今お前舌打ちしただろ!? というか今テキトーに考えたような嘘ついてんじゃねえぞ！」

「まあまあ、そんなに怒らなくても良いじゃないですか先輩。凄く美味しいですよ、これ」

「テメエはテメエで勝手に食ってんじゃねえぞヒナコ！」

まともに取り合ってくれる相手がおらず、発狂寸前の四宮を等閑に、日向子は幸せそうな顔でクラナハンを口に運ぶ。

「ラズベリーの酸味、蜂蜜の甘さ、燕麦の香ばしき、スコッチウイスキーの熟成感……全てが絶妙なバランスで組み合わさっていますね。」

特に、大人の味わいを演出しつつも、可愛らしいデザートとしての側面を殺していないところが素晴らしいです」

「このクラナハンに使っているスコッチウイスキーは、スコットランドの中でもスペイサイドと呼ばれる地域で造られているものです。スペイサイドのシングルモルトは上品な風味と優しい口当たりで定評があります。特にこの『アベラワー』はアルコールよりも甘さの主張が強く、ストレートでも飲みやすいスコッチです。レーズンやバナナのような芳醇な香りが、このクラナハンをより一層エレガンスに仕立てあげます」

響は調理に使った器具を洗いながら、長々と酒の蘊蓄を垂れ流すが、それはバーテンダーとしての一興でもあった。

「確かに、アルコールの刺激を全く感じさせませんね。私はあまりお酒を飲まないんですけど、これなら何杯でもいけそうです！」

ただのデザートとは一線を画す、クラナハンの深みある味わいの虜となった日向子は、忙しなくスプーンを動かす。しかし、クラナハンはその可憐でいて美しい見た目に反して、アルコール度数はなかなかなものである。

響はバーテンダーとしての暦が浅く、ベテランのバーテンダーと比較をすれば、それなりの未熟さは浮き彫りになるであろう。しかし、女性にアルコールを提供する悪知恵……もとい、応用力に関しては他の追随を許さない。人間という生き物は、自分が真に必要としている能力ほど良く伸びるものであり、彼が真に必要としている物が何であるかなど、火を見るよりも明らかであった。

しかし、女が美味いと感じる料理は、基本的に男が食しても美味いと感じるものである。新たな美味を共有せんとばかりに、日向子はクラナハンを多めに掬ったスプーンを、四宮に向かって突き出す。

「味に関して口うるさい先輩も、これにはぐうの音も出ないと思いますよ」

「お前はいちいち俺を煽らないと死ぬ病気で罹患してるのか？」

「ほら、腕が疲れるので早く食べてください」

なかなかスプーンに口を付けない四宮に日向子が口を尖らせるが、

彼は頑なに実食を拒否する。

「要らん。俺はそんな女子女子した物は食べん」

「なんですか、その語呂の悪い造語は……というか急にどうしたんですか？ 四宮先輩、さつきまでスプーンが一つしかないーって騒いで、食べる気満々だったじゃないですか」

日向子が四宮の発言に矛盾が生じている事を指摘するも、四宮は舌打ちをして顔を背けるだけであった。苛立ちの表情を浮かべる四宮とは裏腹に、日向子は小悪魔のようなニヤニヤとした笑みを浮かべ始める。ほど良く酔いが回ってきたのか、その頬は僅かに朱が差している。

「あ、先輩もしかして……間接キスとか気にしちゃってますか？」

「は？ そんな訳ねえだろ。ガキじやあるまいし」

「なんで私の顔見て言わないんですか？ やっぱり恥ずかしいんですか？ 先輩も可愛いところありますね」

「勝手にほざいてろ。早く寄越せヒナコ」

「私はさつきから差し出してますよ？ 先輩がまごついてるだけじゃないですか。はい、先輩。あーんしてください」

依然としてニヤニヤとした顔で日向子がスプーンを突き出す。己の心情を察せられまいと無心で四宮はスプーンを啜える。

「うふふ、どうですか先輩」

「……まあ悪くはない。俺には少し甘ったるく感じるが」

「そうですか？ そんなに甘過ぎるようには感じませんでしたけど……」

言葉を切った日向子は、どこまでも意地の悪い笑みを四宮に向ける。

「私の味でも、しましたか？」

いつもならば問答無用で体罰を食らわせる四宮だったが、この時ばかりはそうもいかなかった。いつまでも成長しない子供みたいな後輩だ……と、常日頃から思っていた日向子が、酒気を帯びて仄かに顔を上気させている。リラックスした愛玩動物のように、緩慢ながらも愛くるしさを覚えてしまうようなゆったりとした動作で、先ほど四宮

が口をつけたばかりのスプーンでクラナハンを削り取り、蕩けるような表情でそれを啜えこむ。四宮にはその姿が、まるで童女が嬉々としておやつに飛びつくようにも見え、楚々とした小町娘が蠱惑的に甘味を嗜んでいるようにも見えた。

「先輩……覚えていますか？先輩がフランスに行くって言った時、私
が先輩に食戟を申し出た事」

ふと物憂げな表情を見せた日向子が、脈絡もなく四宮に問いかける。

「さあ……あつたような気もするな、そんな事」

「覚えてるクセに変な嘘つかないでくださいよ。先輩は私に嘘をつかないと死んじやう病気でも患っているんですか？」

「小学生みたいな意趣返しをするな。勝手に決めつけるんなら最初から訊くんじやねえよ……そもそも食戟と言うか、関守さんの店で個人的な料理対決をしただけだろ」

「ほら、やっぱりちゃん覚えてるじゃないですか。……あの時、先輩にボロ負けして分かったんです。この人は誰よりも料理に熱意を持って、誰よりも努力してきたんだって。だから、誰よりも大きな夢を持つてるんだって。……この人なら絶対に成功するって」

四宮は宙を見上げ、一つ一つ拾い上げるように思い出す。日向子や水原、梧桐田らと共に関守が新たに開店した『銀座ひのわ』へ赴いた、あの日の事を。

あの日、確かに四宮は皆の前で自分が胸に抱いていた野望を熱弁した。四宮自身、らしくない真似だと自覚していたが、自分の先輩である関守が店を構え、自分の道を切り開いている所を目の当たりにした刺激もあつたのだろう……四宮は己のビジョンを打ち明けた。一から修行をし、潤沢な資金を蓄える事。そして、ゆくゆくはシャンゼリゼ大通りに自分の店を立ち上げるといふ、壮大な夢を。

終始不機嫌だった日向子は、四宮のその言葉を聞くなり、店から飛び出してしまった。彼女の心理が全く悟れず、ただただ困惑する事しかできない四宮だったが、彼女の後を追わなければ鮎は食わせん……

という、有無を言わさない関守の命令のもと、四宮は日向子を探し始めた。

公園にいた日向子は、まるで子供のように泣き噓じやくっていた。涙の理由を四宮が無遠慮に尋ねれば、日向子は頬を膨らませて答える。

「そんな素敵な夢を抱いていたのなら。」

「そんな大事な話があったのなら。」

「もっと早くに教えて欲しかった。」

そうすれば、もっと素直に先輩を応援できた。先輩にとって自分たちはどうでもいい存在だったのか？

日向子は憤りを隠す事なく四宮に畳み掛けたのだ。

なぜ、日向子があれほどの怒りを見せたのか、当時の四宮には分からなかった………訳ではない事くらい、今の四宮には分かっていた。

きつと、彼女の涙の理由など最初から知っていた。分からないという事にして、自分の中で折り合いをつけようとしていたのかもしれない………今にも壊れてしまいそうなほど弱々しく微笑む日向子の横顔を眺めながら、四宮はそんな事を考えていた。

「私、先輩が一人でそんな事抱え込んでるなんて知らなくて………自分の中で色々といっぱいになっちゃって、気づいてたら逃げ出しちゃってました。みっともないって分かってても、涙が止まってくれませんでした。先輩に食戟を申し込んだのも、多分フランスに行つて欲しくなかっただけです。凄く自分勝手ですよ、私」

自嘲と罪悪感の入り混じった瞳を覆い隠すように、日向子は瞼をしないで伏せる。四宮は鼻で笑いながら、感傷的になる日向子の後頭部を軽く小突く。

「いたつ………何するんですか!」

「今更何言つてんだ馬鹿が。お前が自分勝手なのはいつもの事だろ」
「なっ………」

「だいたい、食戟で俺を止められるわけがないだろ。實力差を考えろよ、實力差を」

「ほんつと性格悪いですね童貞先輩！人に嫌われる天才なんじゃないですか!？」

「童貞童貞言うんじゃないやねえぶつ飛ばすぞクレイジーサイコレズ女!」
「クレイジーでもサイコでもありません!いつまでも私が負けたままだと思わない方が良いでしょう!?マスター、テキーラください!」

ヒステリックに叫び始めた日向子は、唐突にテキーラを注文する。四宮と日向子に二人だけの空間を作られ、完全に暇を持て余していた響はうたた寝をしていたため、ビクンと体を跳ね上げ、慌ててボトルを用意する。客を舐め腐つてると言われても反論の余地がない接客態度だが、早くテキーラを出せと言わんばかりに息を荒げる日向子と、日向子の突拍子もない言動に毒気を抜かれた四宮がそれを咎める事はなかった。

「おいおい、なんで急にテキーラなんて……」

「やる事なんて一つしかないでしょう?酒飲み対決ですよ、酒飲み対決!これはあの食戟の雪辱戦です!」

破綻した理論を振りかざしてテキーラを所望する日向子に、響が二つ返事で酒を提供する事はなく渋い表情で苦言を呈する。

「……日向子さん。こちら側としては、お客様に危ない飲み方はしていただきたくないと言うのが本心です。病院送りとなつては、楽しい酒盛りも台無しになりますよ」

響はすっかり出来上がっている日向子に警鐘を鳴らすが、彼女が耳を貸す事は無かった。

「大丈夫ですよ。私、結構強いですから」

「やめとけて。クラナハンもほとんど一人で食ってたし、結構な量のアルコールを摂取してるぞお前」

ほぼシラフに近い四宮も響に同調して日向子の暴走を窘めるが、彼女が意に介する事はなく、悪戯っぽい笑みを携え彼を揶揄う。

「なんですか?ビビってるんですか童貞先輩?」

「……………上ツ等だこの変態糞女!おい子供店主、さっさと酒を出せ!この常識のなつてねえ後輩に上下関係つてものを教え込んでやる!」

「いつまでも私が下にいると思わない事ですね！私が勝ったら何でも言う事聞いてもらいますからね！」

「構わねえよ、勝つのは俺だからな。俺が勝った暁には、二度と生意気な口を叩けねえようにしてやるからな？」

煽り耐性の無さが禍して、四宮までその気になってしまいう始末だった。諦観の域に達した響は二人の注文通りに、底の厚いショットグラスとテキーラを取り出す。

「折角ですので、お二人にはテキーラならではの飲み方をしてもらいましょう。『OLMECA BLANCO』をショットガンでお楽しみください」

ショットガン……という、耳慣れぬ単語に首を傾げる四宮と日向子だったが、響は見ていれば分かるとても言いたげな顔で、オルメカをショットグラスに注ぐ。半分ほどまでショットグラスをオルメカで満たしたところで、さらにジンジャーエールを継ぎ足す。

そうしてテキーラとジンジャーエールが1：1の割合で注がれたショットグラスを、響はグラスの飲み口を手のひらで覆いながら、勢い良くカウンターに叩きつける。

ダンツ、という強く打ち付ける音が生じると共に、ショットグラスの中がシユワシユワと発泡する。

「レディーファーストです。まずは日向子さんがお飲みください」

響はジンジャーエールとオルメカが混ざり合ったショットグラスを日向子に差し出すと、彼女は四宮に挑戦的な視線を向けた後、ショットグラスを一気に呷る。

竜舌蘭アガベの独特な風味と強いアルコールを、ジンジャーエールが程よく抑えているのもあってか、日向子はこれしき余裕だとても言いたげなドヤ顔で、ショットグラスを響に返す。

「ふっつ、こんなんじや私は酔いませんよ？さあ、だらしなく潰れる様を私に見せてください、しのみやせーんぱいっ」

これでもかという程ムカつく顔で挑発された四宮はピキピキと青筋を浮かべながら、早くテキーラを寄越せと響を無言で威圧する。響は溜息混じりにショットグラスをカウンターに叩きつけ、四宮に差し

出す。すぐに四宮がそれを飲み干すが、彼は異常に気がつく。四宮は険しい表情で響にクレームをつける。

「おい、何だこれ……ただの水で薄まったジンジャーエールじゃねえか」

四宮は実際に飲んだ感想を述べただけなのだが、日向子はそれを挑発と捉えてしまう。

「へえ……？随分と余裕じゃないですか先輩。でも勝つのは私ですよ？」

不敵に笑い、なおも四宮を焚きつけようとする日向子だったが、その佇まいはどこかそわそわとしていて落ち着きがなかった。ごく僅かな変化ではあるが、女の事しか考えていない響からしてみればみすみすと見逃すような変化ではなかった。

「……日向子さん、お化粧はあちらで直せますよ」

「……気が利きますね。先輩も見習ったらどうですか？」

「いちいちうるせえんだよお前は。我慢してたんならさっさと行ってこいよ」

「ほんとデリカシーないですね！そんなんだから童貞なんですよ先輩は！」

「だからなんで俺が童貞って確定してんだよ！漏らす前に早く行けよ能無し処女！」

日向子は四宮に中指を突き立てた後に、肩を怒らせながらトイレへと向かっていく。完全に日向子が見えなくなったところで、四宮が響を睨みつける。

「おい、クソガキバーテンダー。水で薄まったジンジャーエールを俺たちに飲ませて何がしたいんだ？つうかヒナコもヒナコでなんで気づいてないんだ……舌まで馬鹿になったのか？」

料理人として終わってるだろ……と、独り言ちる四宮を、響はチツチツと人差し指を振って否定する。

「四宮さん、私の左手を良く見ていてください」

質問の答えになっていない響の言葉に四宮が顔を顰めるが、響はどこ吹く風、先ほどのようにショットグラスにテキーラとジンジャー

エールを注いでいく。

そして、先ほどと同じく右手でショットグラスをカウンターに叩きつける……。のだが、その行為と並行して、響は左手でテキーラのボトルを、別のものとすり替えていた。そのボトルは、すり替える前の物と全く同じ『OLMECA BLANCO』のボトルであり、すり替えている瞬間を見ていなければ、何も変わっていないように見えてしまう、完全なるトリックであった。

「お、おい……どういう事だ……？」

「ショットガンの『グラスを叩きつける』というインパクトの大きい行為を利用した、ちよつとしたミスディレクションですよ。日向子さんが飲む時はオルメカの入ったボトルを、四宮さんが飲む時は水の入ったボトルを……と、気づかれない様にすり替えているだけです」

「はあ!?なんだそりや!?!」

響のクズすぎるテクニクに、四宮は開いた口が塞がらなかつた。「女を酔わせる時の基本中の基本……それは自分が酔わない事です。日向子さんを持ち帰る前に四宮さんが潰れてしまったり、いよいよという時に四宮さんの御息がご起立なさらなかつたら、目も当てられませんからね。というわけで、四宮さんにとつても日向子さんにとつても素敵な夜にする為の、バーテンダーのささやかな気遣いだと思つてください」

「おい!別に俺はそんなつもりでヒナコに……ッ!?!」

ゲスの極みと言う他ない響の下世話な勘繰りを否定しようと四宮が声を荒げるが、日向子がトイレから戻った事に気がつき、慌てて口を噤む。

「んー?私がどうかしましたか、先輩?男同士で内緒話とは感心しませんね。さあ、早く第二ラウンドを始めましょう!」

響が明かした衝撃の事実をどう打ち明けようかと四宮が言葉を詰まらせている間に、日向子は酒飲み対決を再開してしまう。

結局、真実を告げるタイミングを四宮は見つけられず、オルメカは日向子に吸い込まれてゆく一方であった。



「えへへえ……しえーんぱい！なんでフラフラしてるんれすかあ？限界なんれすか？もう……しえんぱいは私がないとらめれすね！」
「フラフラしてんのはお前だぞ、ヒナコ……」

二人が酒飲み対決を始めて小一時間……カウンターには絶望の表情で俯く四宮と、そんな彼にベタベタと絡みまくる、ぼわぼわと頬を赤らめた日向子の姿があった。

「なあ、そろそろ終わりにしないか？お前かなり酔っばらってるぞ」
「そうやって変な言いがりつけて勝負を曖昧にしようって魂胆れしよ
う？そうはいきませんよ！」

何を言っても無駄だと悟った四宮は、日向子からショットグラスをひったくり、ひらひらと手を振る。

「ああもう……面倒臭え！俺の負けで良いよもう。だからもう終わりだ。お前はこれ以上酒を飲むな」

自分は全くテキキラを飲んでいないという罪悪感もあつてか、四宮は自分の敗北と言う形で酒飲み対決を強制終了させる。

「やったー！しえんぱいに勝ちましたー！私の言う事、何でも聞いてもらいますからねー？」

「はいはい、お前の勝ちね。何でも聞いてやるよ」

この調子だと、どうせ明日になれば勝負の事も忘れているだろうと高を括った四宮は適当な返事をする。

「今、何れもって言いましたね？じゃあ先輩……二度と、勝手にどこか行こうとしないください！」

「は……？」

「先輩がフランスに行くって言った時……私、凄く寂しかったんです。卒業してもすぐに会えるとはかり思ってたから、急に日本を出るなんて言われたら……そんなの、嫌って思うに決まってるじゃないです

か。でも、先輩に大きな夢があった事も知って、頑張れって応援したい気持ちもあって、自分の中でぐちゃぐちゃになって……気づいたら、泣いちゃってました」

当時の日向子を支配していた感情がそっくりそのまま蘇ったのか、日向子は笑いながらもその頬を濡らしていた。見た事もない日向子の表情を見てしまった四宮は、鈍器で強打されたかのような衝撃に身を固める。

「宿泊研修で先輩と久しぶりに会った時、なんだか先輩が違う人になったんじゃないかと思ってしまいました。すっかり有名人になって、先輩が遠い存在になった気がして。……それに、中身もです。あんなにピリピリした先輩は、私の知ってる四宮先輩じゃなかったです。先輩がすぐ怒るのは元からでしたけど、少なくとも遠月にいた時の先輩だったら、あの時の恵ちゃんに退学を言い渡すような事はしなかったと思います」

「……俺のルセットは絶対だ。それを勝手に変えるなんて、昔の俺でも許さない」

「許しましたよ。学生の時、私がどれだけ先輩に迷惑をかけてきたと思ってるんですか？怒る事はあっても、突き放す事なんて、ただの一度も無かったじゃないですかっ！」

日向子は四宮を強く叱責すると、彼の懐に飛び込み、弱々しく彼の胸に拳を落とす。

「だから……うっ……しえんぱいがこれ以上頑張ったら……もつとしえんぱいじゃなくなっちゃう気がして……うう……これ以上変わらないでください……私の知ってる先輩でいてください……
……私の大好きな先輩でいてくださいよっ！」

日向子は言いたい事を全て四宮に叩きつけると、彼の胸に顔を埋めて啜り泣き始める。四宮は、あの日に泣き噓っていた日向子にそうしたように、日向子の濡羽色の髪を優しく撫で付ける。

「……俺は変わったりしねえよ。お前に絶対成功するって言った手前、絶対に失敗できないから少し気を張ってただけだ」

「嘘です。少し、じゃなかったです。先輩を怖いって思ったの、あの時が初めてだったんですから」

「普段から俺をナメすぎなんだよお前は。ちよつとは先輩を敬え馬鹿が」

口を尖らせる四宮だったが、彼が日向子を撫でる手を止める事はなかった。

「ふふっ……私の知ってる先輩です。水原先輩にも見せてあげたいくらいです、今の先輩を……」

安心したようにそう呟いた日向子は、急に黙り込み体重を四宮に預けてくる。不審に思った四宮が声をかけようとするが、それを阻むように日向子の深い寝息が聞こえ始めた。

「騒ぎたいだけ騒いで寝やがったぞコイツ……」

呆れて物も言えなくなった四宮は、眉を下げて胸元で眠りこける後輩を見下ろす。普段は口喧しい後輩だとしか思っていない彼でも、薄桃色に頬を染め、自分の腕の中で無防備に寝息を立てていると思うと、流石に彼女を女として意識せざるを得なかった。羞恥か、はたまた敗北感からか……彼は苛立たしげに彼女から視線を引き剥がす。

「……お酒、強いですね」

響が含みのある笑みを見せながら、四宮に声をかける。水しか飲ませていない癖にお前は何を言っているんだと、四宮は眉間に皺を寄せて彼を睨みつける。

「さて、日向子さんもいい感じに出来上がりました。あとはホテルに持ち帰るだけですな、四宮さん」

「まだそんな事を言ってくるのかテメエは。ヒナコはそんなんじゃないねえつつつてんだろ」

「どうしてですか？容姿端麗。スタイルも完璧。そして何より、あからさまに貴方に好意を抱いているときています。文句の付け所がないじゃないですか。据え膳食わぬは男の恥ですよ」

四宮はもう一度日向子に視線を落とす。彼女が相変わらず規則正しい寝息を立てている事を確認すると、ゆつくりと言葉を紡ぎ始める。

「……ヒナコを他の女と同じ括りなんかにしたくねえんだよ」

「他の女……？童貞が何を仰ってるんですか？」

「殺すぞテメエ。……自分でこんな事言いたくはないが、遠月にいた頃、俺は結構な人数の女に告げられてる。好意を向けて来たのはこいつだけじゃねえよ」

「確かにモテるでしょうね、四宮さんは。とつかえひつかえだったんですか？」

「人聞きの悪い事言うんじゃねえよ。……俺は自分の料理を極める事だけを考えて、全てに全力で臨んできた。それは今も昔も同じだ。だから、女がどうこうなんて、考えた事もない。俺にすり寄ってきてた女なんてどいつもこいつも例外なく、俺が料理馬鹿だって知るや否や自然と離れていったさ。こいつは料理の事ばかりで、女なんて見向きもしないんだろうな、とでも思つて諦めたんだだろうな。実際、その通りだし」

四宮は過去に自分との交際を求めてきた女たちを鼻で笑うと、日向子に再三視線を落とす。

「けどな、ヒナコは違うんだよ。俺がどれだけこいつを邪険に扱おうが、俺がどれだけこいつの未熟さをボロカスに言おうが、こいつはしつこいくらいに俺についてきやがった。性悪だの、頭でつかちだの、ナルシストだの、うだうだ五月蠅い癖に、こいつはいつも俺に料理で追いつこうと必死になっていた。……元々こいつは鈍臭い奴で、特別突出した才能を持ってたわけでもない。だが、その分こいつは誰よりも努力をしていた。ただの俺の思い上がりかもしれないが、まるで我武者羅に料理の知識と技術を貪っている俺を真似しているようにも見えた。……そんな奴を、他の女たちと一緒にくたになんかしたくねえんだよ」

四宮は基本的に人を褒める事が無い。なぜなら、他の誰よりも自分が一番に料理に対して熱意を注ぎ、直向きな努力を積み重ねていると自負しているからだ。そんな彼でも、日向子の事は認めざるを得なかった。

「こいつは俺にとって特別な存在だ。俺は……俺は、こいつを大事に

したい。酒をこまして食い物にするなんて、できるわけがないだろ」
四宮の嘘偽りない胸の内を聞いた響は、小さく笑いながらオルメカのボトルを棚に戻す。

「……四宮さん、貴方は真面目すぎます。ですが、そんな貴方だからこそ、貴方は色んな人たちを惹きつけられるのでしょうか。そして、より強く引き寄せられたのが日向子さんなのかもしれないですね」

響は二人のグラスを引っ込めると、代金を書いた紙を四宮に差し出す。

「さあ、いつまでもこんな所で油を売っていては男が廃りますよ。夜は長いですが、明けない夜はありません。さっさと良さげなホテルを探して、愛を確かめ合ってください」

「人の話聞けよ。お前にとって女はそう言うモンかもしれないが、俺にとってはそうじゃない。勝手な事をほざくな」

「おや、私に女を語りますか。私から言わせてもらいますと、日向子さんが本当に酔い潰れて寝ていると思っっているようでは、まだまだ経験値が足りませんね」

一瞬、日向子の寝息が止まってしまふ。それを見逃す四宮ではなかった。

恥ずかしすぎる心情の吐露を日向子に聞かれていたと言う事実を突きつけられた四宮は、これ以上になく赤面する。

そして、酒に酔ったフリを看破され、四宮に対する好意が余す事なく露呈してしまった日向子は、元々赤かった顔を更に赤らめる。

「……………すう……………すう……………」

「……………もう何をやっても無駄だ、ヒナコ……………チクシヨウ、なんで起きてたんだよお前……………クツソ死にてえ」

「……………わあああああああ！もうっ！普段ツンツンしててそんな素ぶり全く見せないくせに、何ですかあれ!?ズルいです！ズルすぎます！タラシ先輩！」

「はあ!?わざわざ酔ったフリして俺にデレデレしてきたお前に言われる筋合いはねえよ！」

「うあああああ!?それはもう忘れてください！お願いします！さっ

き何でも言う事聞くって言ってたじゃないですか！だから忘れてくださいー！」

「そんな都合よく記憶消せるかっての！大体何でも言う事聞くって言うのはもう無効だろ！『もう二度と勝手にどこか行こうとしないてください』って……」

「きゃあああああ!?だからそれを忘れろって言ってるんですよっ！」

代金を支払った二人は、入ってきた時と同じように稚拙極まりない口喧嘩を繰り広げながら "Heaven's gift" を後にした。

「……中学生の恋愛かよ。砂糖吐くかと思ったわ」

一人残された響は、先ほど挽いた残りの豆でコーヒーを淹れる。その強い苦味が、今の彼には丁度良かった。

「手探りの恋ってのも悪くないんじゃないですかね？たくさんの女を知る事は簡単ですが、一人の女しか知らないと言うのは中々できる事じゃない。それは、童貞というブランドを持った男にだけ許された特権ですよ、四宮さん」

酒は天の美祿なり。

不器用な二人が初めて放った恋の矢は、予測不能の軌道を描いて、互いを正確無比に射抜くのであった。

情熱のフランベ

月饗祭^{げつきようさい}。

料理こそが全てとされる遠月茶寮料理學園で行われるその一大イベントは、世に言う学園祭を謳ったものである。しかしながら、和氣藹々とした一般的な文化祭^そとは似ても似つかぬ、異様な緊張感が支配する殺伐とした世界であった。

それぞれが得意とする料理を武器とし、個人、或いは団体で模擬店を開き、その売り上げを競い合う様は、まさに修羅。クラスの間々衝突を繰り返しながら創り上げる舞台演劇や、気になるあの子のクラスがメイド喫茶を開く……などという事も当然ない。

売上という色気も何も無い数字だけを求め、生徒たちは闘志を燃やし、月饗祭はこれ以上にならない盛り上がりを見せる。そんな生徒たちを尻目に、人の模擬店を巡り歩いて食い道楽を満喫する者もいるが、それもまた月饗祭の楽しみ方であった。

月饗祭は例年通りの盛り上がりを見せ、祭りの名に恥じぬ賑わいを呼んだ。しかし、遠月學園の広大な敷地すらをも埋め尽くす雑踏も、夜の帳が下りれば些か静けさを取り戻す。

大半の人々が去って尚、彼らの冷めぬ興奮だけが残されているのだろうか……こびりついたかのように残留する祭の熱気を肌で感じながら、幸平創真は『山の手エリア』を歩いていた。

「司先輩……流石は十傑第一席、あんな料理の世界があつたなんてな……おもしろえ……!」

実質的に遠月生の頂点に君臨していると言える『司 瑛士』の模擬店に足を運び、彼の異次元的な腕前を直に見せつけられた創真だったが、その圧倒的な実力差を前にしても臆する事なく、立ちほだかる大きな壁に闘志を燃やしていた。

「うかうかしてたらいつまでも勝てねえだろうな、あの人には。俺はもつともつというんな料理を知る必要がある。せつかく山の手エリアまで来たんだ……まだまだ見て回らねえとな!」

大きな実力に触発され、食の探求心を殊更増大させる創真だが、彼は模擬店で実食するために必要な『松チケツト』を使い果たしてしまっている。大人しく帰るしか選択肢が無いように思えるが、創真にはひとつだけアテがあった。

「いや、薙切に胡椒餅フージャオピン食わせといて良かったわ」

創真としては、自らの模擬店で作った料理をえりなに与えたので、貸しひとつ……というつもりでいるのだが、えりなサイドとしては別に求めてもない胡椒餅を押し付けられただけであり、貸しも借りも何もない。無論、創真はそんな事実を認知していない。

創真が無遠慮にえりなの模擬店へ入り込めば、えりなのお付きである緋紗子が彼を怪訝そうな表情で迎える。

「お客様、当店は予約制なので……って幸平!？」

「よう新戸。わざわざ山の手エリアに来たんだし、薙切の料理も食っておかねえと思って」

創真は悪びれる事なくカラカラと笑いながらテーブルに着こうとする。自由奔放にも程がある創真の立ち振る舞いを緋紗子が咎める前に、招かざる客の来店に気づいたえりなコックが顔を真っ赤にして彼を叱責する。

「ちよつと幸平くん、ここは予約制よ!?!なに当たり前のように入って来てるのよ!」

「薙切の模擬店すげえな。お客さんみんな審査員やってたお偉いさんばっかじゃん。なんかセレブ御用達の高級料理店みたいだな」

えりなの小言を馬耳東風し、見当違いな返答を返す創真に、彼女は諦めに近い溜め息を溢す。

「……大体、私の料理を食べるにしても、松チケツトはあるの?」

「いや、薙切に胡椒餅あげたじゃん?それで貸し借り無しって事で」

「はあ……一体何を食べて育ったら人間はここまで図々しくなれるのかしら」

えりなは親の顔が見てみたいと言わんばかりの冷え切った目で創真を睨みつけるが、彼は何処吹く風だった。

「そのテーブル以外で、空いてる席に付いて頂戴」

えりなが指し示すテーブルは、この店の中でも最も良い配置にある卓で、いつでも料理を出せるよう、食器まで準備してある。

「あんなに良い席をとっとくなんて、誰か予約でもしてんのか?」

なぜこれほど良いテーブルを空席にしているのか疑問に思った創真が尋ねるが、えりながまともに取り合う事はなかった。

「君が知る必要などありません。そのテーブルに座れるのは、定食屋の君とは縁えんも所縁ゆかりもないお方よ」

……創真をこき下ろしつつ突っぱねるえりなだったが、皮肉な事にもその人物は創真と最も近い関係にある男であった。だが、誰のことを示唆しているかなどえりなの言葉では分かるはずもなく、創真は大入しく彼女の指示に従い別のテーブルに着く。

「いや、何だかんだ薙切の料理食うのって初めてだな。新戸は毎日作ってもらってんだろ?」

えりなが不機嫌そうに厨房へと引っ込んでしまい、料理が出るまで手持ち無沙汰となった創真が、それとなく緋紗子に話を振る。突飛な質問に一瞬呆ける彼女だったが、貴様は何を言い出すのだと手を振って否定をした。

「えりな様の手料理を毎日!?そんな身の丈に合わない寵愛を受けられる訳がないだろう!そんな夢のような毎日が続いたら、恐れ多くて頭がどうにかなってしまふ……」

「……薙切の料理食ったら頭おかしくなるのか?」

「なあ!?なぜそうなる!?自分の頭を心配しろ!」

牙を剥いてまくし立てる緋紗子だが、何やら刺々しい視線を向けられているのを感じ取り、そちらを見やる。視線の主は、厨房の入り口から顔を半分だけ出し、半眼のジト目で創真と緋紗子を睨みつけるえりなだった。

「……二人とも何を騒いでいるの?他のお客様にご迷惑よ」

「も、申し訳ございません!幸平があまりにも無礼な物言いをしたので……」

「よく分からないけど静かにして頂戴。……まったく、最近仲が良すぎじゃないかしら、あの二人。私の知らない間に何があったのかしら

……」

何かをブツブツと呟きながら、面白くなさそうに頬を膨らませたえりなが厨房へ引っ込んでゆく。

「ゆ、幸平……っ！ 貴様が馬鹿な事を言うから、えりな様にお見苦しい所を見せてしまったではないか……って、おい！どこへ行くんだ幸平!?!」

声量を抑えて創真を口撃するが、聞く耳を持たない彼は席を立って厨房の方へと向かって行く。未だ創真が実食した事のない薙切えりなの料理……その調理過程が気にならないはずがなかった。

コックコートに身を包み、調理台の前に立つえりな。彼女の佇まいは創真が思い描いていたものとかげ離れたものだった。

十分に下準備を済ませた食材に火入れをするえりな。その眼差しこそは真剣なものであるが、そこに気迫や威圧感と言ったものはなく、どこか穏やかな雰囲気を漂わせている。

「編入試験……か」

一瞬、何かに思いを馳せるような表情で呟いたえりなは、恥じらうように頬を朱に染める。どこか不慣れな手つきで、彼女は2本の酒瓶を取り出す。各々のボトルには『カミュ X・O・エレガンス』と『ロン・サカパ センテナリオ23年』と銘打たれている。

栓を抜くと、フルーティーかつスパイシーな香りが、えりなの鼻腔を上品にくすぐる。彼女は、まるで初めてもらったラブレターを読み返すかのように、優しく目を細める。

一度頭かぶりを小さく横に振った彼女は、カミュ X・O・エレガンスをフライパンに垂らす。間髪入れずにフライパンを傾けると、不完全燃焼の赤い火柱が瞬間的に発生する。えりなはロン・サカパ センテナリオ23年でも同様の工程を踏む。

蒸発したアルコール分に着火し、フライパンが炎上するその派手な演出のせいで、フランベはパフ格オーマンズ好としての側面が強いと思われがちだが、一流のシェフが行う場合はその限りではない。食材に香り付けをするだけでなく、食材の旨味を閉じ込める作用がフランベにはあるのだ。手際が悪いと逆に料理を台無しにしかねないが、薙切え

りなどという料理人がそのようなハマをするわけもない。

フランベの炎に絆ほだされたが如く薄桃色に頬を上気させたえりなは、キッチン戦場に立つコックとしては不相応なほど艶めかしく、場違いなほど蠱惑的だった。

創真と同じ一年生でありながら、遠月学園の『十傑 第十席』の座を占める薙切えりな。卓越した実力で弱者を情け容赦なく叩き潰し、絶対的な味覚で出来ない料理を食べ物として扱っていないかのように切り捨てるその冷酷さから、『氷の女王』の異名で恐れられている。

だが、異様な熱量と色気を垂れ流す今のえりなの姿からは、氷の女王たらしめる要素などまるで見当たらない。もはや別人とも言えるえりなの豹変ぶりに、創真は啞然とする他なかった。そんな彼の傍らで覗き見る緋紗子も、創真と全く同じ顔でえりなの調理を眺めていた。長年、えりなの付き人として彼女の側に居続けた緋紗子ですら、今のえりなは見た事のないものだった。

「……本当、礼儀も節度も弁えていないお客様ね。テーブルで大人しくしてなさい」

覗き見をされている事に気づいたえりなが、顔も向けずに非難する。だが、心なしか彼女の耳は紅潮しており、その口調も早口になっている。今の自分の姿を見られた事に少なくない羞恥があつたのだろう。

創真が言われるがままにテーブルに戻り、大人しく料理を待つ。先程、えりながフランベをしていた事を鑑みて、料理は完成を目前にしている事は明白であり、さほど待つ必要もなく創真の元にえりなの料理が鎮座する。

「……えりな様から言伝を預かっている。『シャトーブリアンク F I a m m e d u p c h 』です。物乞いをする君の為に仕方なく作った気まぐれの品だから、この程度が私の料理だとは思わないように」……だ、そうだ」

給仕サーブを任された緋紗子がそう伝えると、創真は澁面を浮かべて小さく笑う。

「……これが気まぐれの産物って言うんなら、俺が今までに見てきたステーキは一体何だったんだって話になるんだけどな」

創真の前に出された料理は、究極の希少部位として名高い、テンダーロイン牛ヒレ肉の中心部分を贅沢に使ったステーキ『シャトーブリアン』である。

人間が持つ原始的な食欲を掻き立てるかのような、理想的な焼き上がり。それでいて、ステーキという料理の無骨さを微塵も感じさせぬ、上品な香り。実食する前から格別の逸品だと悟らせてしまう程、このシャトーブリアンは高い完成度にあつた。並みの料理人が全力を賭したところで、繊細に、緻密に、完璧に組み立てられたこのシャトーブリアン芸術品には到達できないだろう。

創真はシャトーブリアンにナイフを入れる。切り分けられた断面は、鮮やかな真紅で彩られ、レアブルで焼き上げていることを強調している。

美味である事が約束された外観と芳香に抗えるわけもなく、創真はシャトーブリアンを口に運ぶ。待っていましたと言わんばかりに、創真の口腔内で肉汁が溶け出し、焦らしに焦らされた味覚に快楽を与える。

ムラのない焼き上がり、えりなの下ごしらえが完璧である事を示唆しており、希少部位にだけ許された極上の肉質がしつかりと活きている。

脂と共に流失される分も計算に入れて味付けがなされており、絶妙な分量の岩塩が食材本来の風味を殺さずに付加価値をもたらしている。

気まぐれでこんな芸当ができる料理人は、この学園に……いや、この世界に一体何人いると言うのだろうか。

「……なるほど。敢えて白胡椒を使っているのか」

ステーキに使用するペッパーは、牛肉が持つ臭みを取るために、香りの強い黒胡椒を選ぶ事が多い。しかし、えりなが手掛けたシャトーブリアンには、香りも辛みもマイルドな白胡椒が使われている。素材の良さを前面に押し出す為でもあるのだが、彼女の意図もつと別の所

にもあるのだ。

「……すげえのはそれだけじゃないな。これだけ素材の風味を残しておきながら、全く別の香りでドレスアップしている」

えりなが主張の弱い白胡椒を選定した真の目的とは、二度にも渡るフランベによって、シャトーブリアンに芳醇な香りを付与したからに他ならない。

肉々しきとはかけ離れた、仄かに甘い華やかさと、気品溢れるスパイシーさ。その気取らない上品な香りが、シャトーブリアンの魅力を最大限に引き出している。

無駄な装飾のないAラインドレスは、女性の持つ美しさを最大値にまで引き上げつつも、女性より目立つ事がない。えりなが二度に渡って行ったフランベは、シャトーブリアンを着飾る為のドレスにあたるのだろう。

何時ぞやにえりなが出会った男は、料理と女を輝かせる術を知っていた。あの日、えりなが口にした『ブランドー・エッグノッグ』は、えりなの料理に……いや、えりな自身に少なくとも影響を与えたのだ。

……否、それらの変化を受け入れようと、彼女自身が変化を望んだのかもしれない。それが彼女のさらなる成長へのきっかけとなったのか、失墜の始まりとなったのかは、このシャトーブリアンが物語っている。

「……雑切って、こんな料理作るんだな」

初めて実食したえりなの料理は、創真が想像していたものと違えていた。

「……？どういう意味だ？」

創真の言葉の意味する所を図りかねた緋紗子が尋ねると、彼は小難しそうな表情で言い改める。

「いやさ、俺の勝手なイメージだけど、雑切って料理に『想い』だとか『感情』を乗せるタイプじゃないと思ってたんだ。なんかこう、料理はこうあるべきだ、それ以外は料理ですらない……みたいな感じで、淡々と料理を食べて、淡々と料理作る。それがあいつだと思ってた。でもさ、このシャトーブリアンはなんか『雑切の作りたいように作っ

た』ってのがすげえ伝わってきたんだ」

創真がえりなに抱いていた人物像を聞いた緋紗子は、一度はポカんと口を開けるが、すぐに優しい笑みを携え静かに頷く。

「えりな様は少しずつ変わらている。今まで触れて来なかった料理たちが、今まで会った事のない遠月生徒^{料理人}たちが、えりな様の刺激となっているのだろう」

「確かに、面白い料理する奴ばっかだもんな。いやー、俺も毎日が新しい事だらけで本当勉強になるっていうか……」

「何を他人事のように言っている。勿論、そこに貴様も含まれているのだぞ、幸平。寧ろ幸平は……ん？」

妙な視線を感じた緋紗子が言葉を切る。そちらを見やれば、またしても厨房から半身だけを覗かせたえりなが半眼ジト目で創真と緋紗子を見やっていた。

「やっぱり……どう考えても仲良すぎよ、あの二人……」

呪詛のようにブツブツと呟くえりなが不気味だったのか、緋紗子はたじろぎつつもえりなに声をかける。

「え、えりな様……そのような険しい表情をされて、一体どうなされました？」

「……別に？どうもなってますんっ」

緋紗子の伺いに顔を背けたえりなが厨房に引つ込もうとするが、それを創真が引き止める。

「待てよ。薙切のシャトーブリアンめちやくちや美味かったぜ」

「……当然よ。誰が作ったと思っっているのよ。不味い訳がないじゃない」

「そこまで言い切れるとすげえな、流石に」

「私の舌に間違いも誤りも無いわ。だから、私が作る料理に瑕疵なんてあるわけがないわ」

えりなにある絶対的な自信の根拠は、彼女が持つ『神の舌』が味の善し悪しを人一倍鋭敏にジャッジできる所にある。その事を自覚しているえりなは自分の作る料理を信じて疑っていなかったが、不思議な事にもその顔に驕り昂りといったものは見受けられなかった。

「それでも……瑕疵はなくても、足りない物は無限に存在している。私はまだ知らないままでいる味が、料理が、世界がある。それが美味なる物なのか、論ずるに値しないもののかは分からない。だから、それらを探し続ける必要があるのよ。私のまだ知らない『美食』は、無数に存在しているのだから」

薊の洗脳的教育よって完成したえりなの『神の舌』は、閉ざされた美食の世界でこそその才覚を存分に見せる。しかし、その世界を一步でも外に踏み出してしまえば、彼女は眼前にある美食を美食と認知できないのだ。

いつかの編入試験に、美味いと感じた創真の『化けるふりかけごはん』を拒絶したのも、あの男が出した『ブランドー・エッグノッグ』にまるで免疫が無かったのも、全てその弊害が顕著に現れたものに他ならない。

彼女の料理は完結してしまっており、不出来な品を出す事がなくても、それ以上の品を作りあげる事もできない……その事実にえりなは気づきつつあり、その事実を受け入れつつあるのだ。

「……やっぱり確切って変わったよな。編入試験で試験官やってた時のお前がそんな事言う所、想像できねえもん」

「っ!?!あの時の話はしないで頂戴っ!」

「何急に怒ってんだよ。あの日の事、納得してねえのは俺の方だし。美味そうに食ってたお前に不味いだなんて言われたの、俺はまだ納得いってねえんだからな」

「……不味いから不味いって言ったのよ。思い上がらないで。私に美味しいと言わせたいなら、もっと腕を磨いてそれなりの品を出してみなさいな」

「へっ、言われなくたってこっちはそのつもりだったの。その『神の舌』が俺の料理じゃなきゃ物足りなくなるってくらいの料理を作つてやるからよ」

「……口だけの料理人にならないと良いわね」

冷たい物言いをするえりだが、その口角はわずかに上がっている。幸平創真という料理人に秘められた無限の可能性を、えりなは認

めつつあるのだ。

創真が編入して来た日、彼はえりなに同様の啖呵を切っている。『楽しみにしてな。アンタの口からはつきりと美味いって言わせてやるよ』

下町の料理人が作る料理など、天地がひっくり返っても『美味しい』と言える訳がない。当時のえりなは、彼の言葉を馬鹿馬鹿しいと軽んじていた。しかし、彼ならば自分の知らない『美食』を思いもよらぬ手段によって創りあげ、自分を料理で屈服させる日が来るのだろうか、えりなは曖昧な確信を抱いていた。

「……幸平くん。どうしてそこまで私に美味しいと言わせる事にこだわりの？」

えりなが素朴な疑問を口にする、創真は不敵な笑みを彼女に向ける。

「お客様に不味いなんて言われたままじゃ、店の面目が立たないだろ。それに……お前に美味いって言させた奴がいるんだ。そんなの、嫉妬するに決まってるだろ」

創真は編入試験の時にえりなから逃げなかったもう一人の男を思い描く。どこかスカした態度で壁に背を預けるイングリッシュドレープの3ピーススーツを着たあの男は、試験でえりなに『美味しい』と言わせた。

スタジオの時に緋紗子からその話を聞いた創真は、並々ならぬショックを受けた。えりなが自分の料理を不味いと言ったのは、彼女の性格に難があるからだ……心のどこかでそう思っていた創真は、自らの甘えを自覚した。

えりなの舌を喰らせる事が出来なかったのは、自分の料理には彼女を喰らせる何かが足りなかっただけである。

その現実を突きつけられた創真は、もはやえりなを『美味しい』と言わせる事しか考えていなかった。ここどころ、飄々とした態度でえりなの元に自分の料理を持っていく事が増えてきた創真だが、その行動原理はただ単に味見をしてもらいたいだけではないのだろう。それは彼なりの『自覚なき感情』の表れなのかもしれない。

料理人としての意地が、男としての意地が、今の創真を突き動かしていた。

創真より少しだけ大人なえりなは、彼の『自覚なき感情』の正体に、ほんの少しだけ気づいてしまう。

「なっ……急に何を言い出すの!?!し、嫉妬だなんて……」

「ん?どうした?顔が真っ赤だぞ雑切。体調悪いのか?」

「ちよっ、近づかないで!破廉恥だわ!」

「どうされたんですかえりな様!?!幸平あ!貴様、えりな様に何をしました!」

「……やっぱり女ってよく分かんねえわ。どうやって雑切こいつに美味いって言わせただよ、あいっ」

料理以外の事で頭を悩ませる創真は、凶らずも自分に足りない何か
に近づきつつあった。